線で粗雑な重弧文が描かれる。

50～52は口縁下に幅広の無文帯を持ち、頸部に平行沈線が巡る。50は棒状工具による平行沈線の上下に細手の竹管状工具先端を用いた円形の刺突が施される。

51は平行沈線状に瘤状の貼付文がみられる。53～56は無文の口縁部である。54以外は口唇部肥厚し、内面に稜を形成する。

57は唐草文系の深鉢胴部である。頸部には交互刺突を伴う隆帯が巡らされ、胴部に二本隆帯の唐草文が描かれる。地文はＲＬ単節の縄文である。

58は小型深鉢の胴上半部で、方形の区画内部に刻みを伴う横位の平行沈線が重畳するもので、器形は若干異なるもののＡ区第19号住居跡９の個体に類するものであろう。

59は外屈する口縁部で、無文胴張りの浅鉢に伴うものである。

60・61はソロバン玉状に張り出す浅鉢胴部中段で、胴部上半にはキャリパー類深鉢の口縁部文様帯に由来する渦巻文が描かれる。60の地文は縄文、61は棒状工具による集合沈線である。胴部以下は無文である。

62は深鉢底部の破片である。地文は縦位の撚糸文が施文され、底部周辺には横位の削りが施される。

63は浅鉢に伴うもので、胴下半部から底部にかけての破片である。

65はキャリパー類深鉢の口縁部で、隆帯＋沈線により口縁部文様帯が描かれる。地文はＲＬ単節の縄文である。

62・66・67は磨消し懸垂文が垂下する胴部である。地文はいずれもＲＬ単節の縄文である。68は胴下半部から底部にかけての大破片である。底部直上にくびれを持ち、胴下半部が球胴状に張り出す。磨消し懸垂文が垂下し、地文はＲＬ単節の縄文である。

69は深鉢口縁部直下の破片である。口縁直下に１条の沈線が巡り、同上半部に鋸歯状の磨消しモチーフが描かれる。地文はＲＬ単節の縄文である。

72も口縁部直下の破片であると思われる。箆状工具先端を用いた米粒状の刺突列が横位に巡る。地文はＲＬ単節の縄文で、この部分に関しては横位回転で施文されている。

73については後期以降に属するものであるかも知れない。薄手かつ堅緻な器壁で、先の尖った工具の先端を用いた刺突が一面に施される。

74は深鉢口縁部で、口縁下に無文帯を持ち、胴部との境をごく細い沈線で区画する。

75は両耳壺であろう。胴上半部の文様帯と無文の口縁部の境界部分の破片である。地文はＲＬ単節の縄文である。頸部には横位の研磨が徹底される。

76は磨消しモチーフにおける無文部であろう。77は無文で、深鉢底部直上部分の破片である。78の胴下半部は櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。

A区第40～43号住居跡（第89図～第100図）

D－6、E－5・6区に所在する住居跡群である。この区域においては土壙を含む多数の遺構の切り合いのために、発掘調査段階では個別の住居跡のプランの確定が非常に困難な状況であった。したがって、今回図示した遺構図はかろうじて検出された壁・壁溝・炉跡などの位置関係を基に整理作業の段階で推定・復元されたものである。以下記述する住居跡群については個別の形態は無論のこと、遺構どうしの位置関係・新旧関係も一部を除いて確定されたものではないことをあらかじめ断っておく。

したがって、出土遺物についても復元個体に関しては極力その出土地点を図示したが、それ以外の破片資料については一括して呈示し、土壙も含んだ遺構群全体の時間幅を示すにとどめた。

第40号住居跡（第89図）はE－6区に所在する。床面北西部分の大半を第43号住居跡に、床面中央部を第41号住居跡に、南壁部分を第42号住居跡に切られるものと思われる。また、東壁で第39号住居跡を切るものと思われる。さらに、第121・122・125・126号土壙に切られるほか図示したとおり多数の土壙と切り合い関係にあるが、それらとの新旧関係は明らかではない。

第39・43号の両住居跡にはさまれて南西壁と北東壁の一部が検出されたほか、西壁部分で2重に巡る壁溝の一部が検出されている。これらの位置関係から7.8m×6.3mの住居跡として復元したが、平面形・主軸方向など詳細については不明である。壁高は残りの良い部分で約25cmである。

床面上から多数のピットが検出されたが、第41・42号住居跡との切り合いのため、本住居跡に確実に伴う柱穴を特定するのは困難であり、柱穴配置は不明である。炉跡は検出されなかった。

第41号住居跡（第89図）はE－6区に所在する。第40号住居跡の床面上で壁溝だけが断片的に検出された。第40号住居跡を切り、北西半の大部分を第43号住居跡に切られるものと思われる。また、第121・126号土壙に切られるほか、第120・124・130号土壙とも切り合い関係にあるが、それらとの新旧関係は明らかでない。

セクション上で観察された壁高は約30cmで、第40号住居跡よりも若干深い掘り込みを持つ。検出された壁溝の位置関係から一辺4・2mの隅丸方形ないし台形の住居跡であったと推定される。本住居跡の柱穴配置は不明である。土壙による破壊を被ったものか、炉跡は検出されなかった。

第42号住居跡（第90図）は本住居跡群中最も新しいと思われるものである。炉跡・埋甕を中心としてピット群が散在するもので、その分布は第39・40・41・43号の各住居跡に重なっている。また、ピットおよび埋甕の掘り方が第122・125・126号土壙を切るほか、第41・123・124号土壙とも切り合い関係にあるが、それらとの新旧関係は不明である。

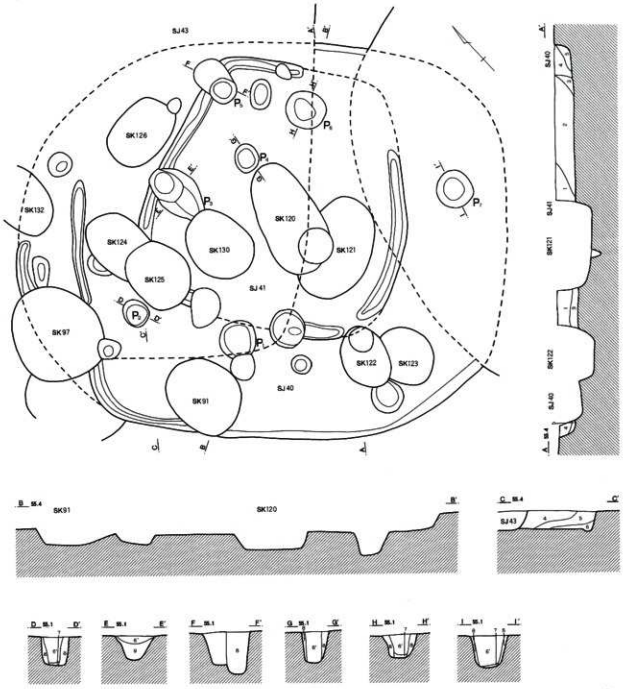
ピット群は直径約5mのほぼ円形に並び、壁柱穴を構成するものとみられる。深さは45cm～1mを測るが、最も深いP1を除けばこれは他の住居跡の床面からの深さである。

炉跡はピット群の中央やや南寄りに位置する。円形の地床炉で直径45cm、深さ34cmを測る。炉跡から南に1.15mを隔てた地点で埋甕が検出された。これは胴下半部を欠失する深鉢を逆位で埋設したものである。埋甕に伴う掘り方は径約40cmの不整円形で、深さ22cmを測る。埋設土器はこの掘り方の底面から若干浮いて、南に傾いた状態で出土している。なお、炉跡と埋甕を結ぶ線を本住居跡の主軸線と仮定した場合、N－14°－Eを指す。

埋甕を有する本住居跡は、第40～43号の住居跡群中唯一確実に伴う遺物を伴出していることになる。埋甕の時期は縄文時代中期末葉である。

第43号住居跡はD－6、E－5・6区に所在する。南壁コーナー部分で第40・41号住居跡を切っており、また第42号住居跡に切られるものと思われる。さらに第125・126号土壙に切られるほか、図示したとおり多数の土壙と切り合い関係にあるが、それらとの新旧関係は明らかでない。

第89図　A区第40・41号住居跡



AKSJ40・41

1　黒褐色土　：ローム粒子多く、焼土粒子微量、炭化物やや多く含む　締まり強

2　黒褐色土　：ロームブロック多く、焼土粒子微量、炭化物少量含む　締まり強

3　褐色土　：ロームを主体とする褐色土層　貼り床の一部か　締まり強

（以上、SJ41覆土）

4　黒褐色土　：ローム粒子多く、炭化物粒子やや多く焼土粒子微量含む　締まり強

5　黒褐色土　：ロームブロック・ローム粒子多く、炭化物少量、焼土粒子微量含む　締まり強

6　褐色土　：ローム主体に褐色土を混入　締まり強　貼り床の一部か

（以上、SJ40覆土）

6'　黒褐色土　：ローム粒子やや多く、焼土粒子微量、炭化物粒子少量含む締まり強

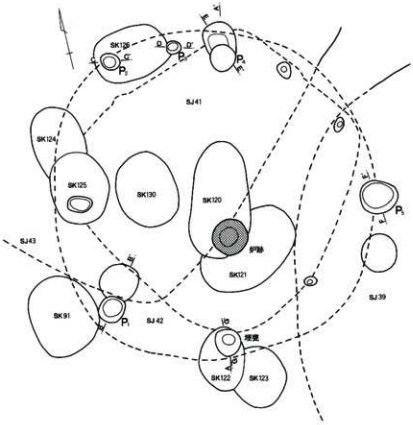
7　褐色土　：ロームブロック多く、ローム粒子やや多く、焼土粒子微量、炭化物粒子少量含む　締まり強

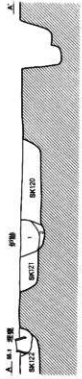
8　褐色土　：ロームブロック多く、ローム粒子やや多く、焼土粒子微量、炭化物粒子少量含む　締まり強

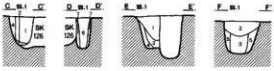
9　褐色土　：ローム粒子多く、炭化物微量含む　若干の灰を含む　締まり弱　地山埋め戻し

0　2m

第90図　A区第42号住居跡







A区ＳＪ４２炉跡
1　黒褐色土　：ロームブロック・ローム粒子多く含む　焼土粒子やや多く含む　締まり良し
2　暗褐色土　：ローム粒子やや多く含む　焼土・炭化物少量含む　底面は被熱・赤化する

A区ＳＪ４２
1　暗褐色土　：ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子微量含む　締まりやや弱
2　暗黄褐色土：ローム粒子多く含む
3　暗褐色土　：ロームブロックやや多く含む
4　黒褐色土　：ローム粒子やや多く、炭化物少量、焼土粒子微量含む　締まり強
5　褐色土　：ローム粒子やや多く含む　締まり強
6　暗褐色土：ローム粒子・炭化物やや多く含む　締まり強
7　暗褐色土：ローム粒子多く、炭化物微量含む　締まりやや強

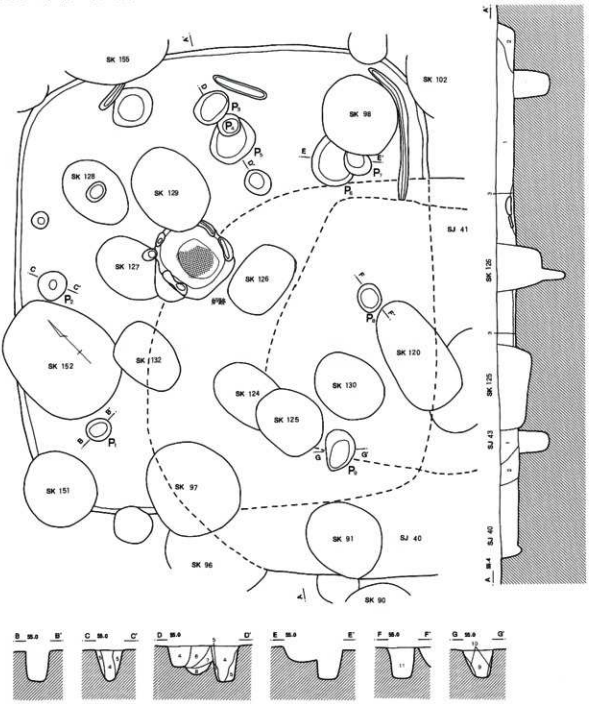
0　2m

埋甕

A区ＳＪ４２埋甕
1　暗褐色土　：ローム粒子多く含む　ローム粒子少量含む

0　1m

第91図　A区第43号住居跡



AEESJ43

1　黒褐色土：ローム粒子多く、焼土粒子・炭化物少量含む　締まりやや強

2　暗黄褐色土：ローム主体で褐色土を混入する　再堆積ローム　締まりやや強

3　黒褐色土：ローム粒子多く、炭化物微量、焼土粒子ごく微量含む　締まりやや強

（以上、SJ43覆土）

4　黒褐色土：ローム粒子やや多く、炭化物少量、焼土粒子微量含む　締まり強

5　褐色土：ローム粒子やや多く含む　締まり強

6　暗褐色土：ローム粒子・炭化物やや多く含む　締まり強

7　暗褐色土：ローム粒子多く、炭化物微量含む　締まりやや強

8　褐色土：ロームブロック多く、ローム粒子やや多く含む　締まりやや強

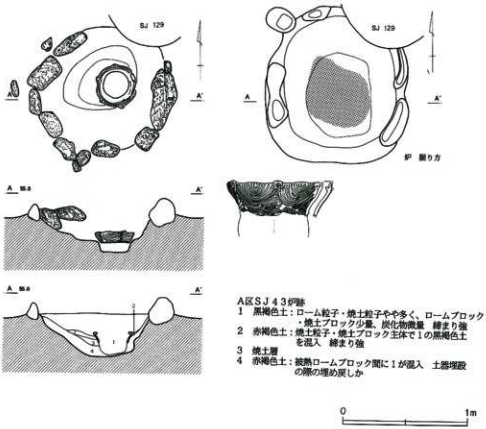
9　褐色土：ローム粒子多く、炭化物微量含む　締まり弱

10　暗灰褐色土：ローム粒子やや多く、焼土粒子・炭化物微量含む　締まり強

11　褐色土：ローム質で、全体に粗粒　締まりやや強　柱穴埋め戻しの際の充填土か

0　2m

第92図　A区第43号住居跡炉跡



本住居跡のプランは、北東壁および北と東の各コーナーがそれぞれ検出された。西壁コーナー付近は土壙との切り合いが密であったため、立ち上がりも部分的にしか検出されなかった。また、別の遺構の立ち上がりを本住居跡に属するものと誤認している可能性もある。これらの壁の位置関係から本住居跡は7.3m×6.7mの隅丸長方形を呈するものと推定された。この場合主軸方向はN－42.5°－Eを指す。壁高は最も確実な北東壁部分で28cmを測る。壁溝は東コーナーおよび北東壁で断片的に検出されたのみである。床面はほぼ平坦で、中央部分が若干落ち込んでいる。

炉跡は床面中央部で主軸線よりやや北西寄りで検出された。いわゆる石囲埋甕炉で、直径約1mの不整円形を呈する石囲部の炉床面ほぼ中央に曾利系の深鉢口縁部を転用した炉体土器が埋め込まれている。炉床までの深さは約12cmを測る。炉体土器を撤去し、土器埋設の際の埋め戻しとされた赤褐色土を取り除いたところ、長径1.2m、短径1.1mの隅丸長方形の掘り方があらわれ、この掘り方底面にも部分的な焼土の散布がみられた。このため、本住居跡の炉跡は土器埋設以前にも石囲炉ないし地床炉として機能した時期があった可能性もある。

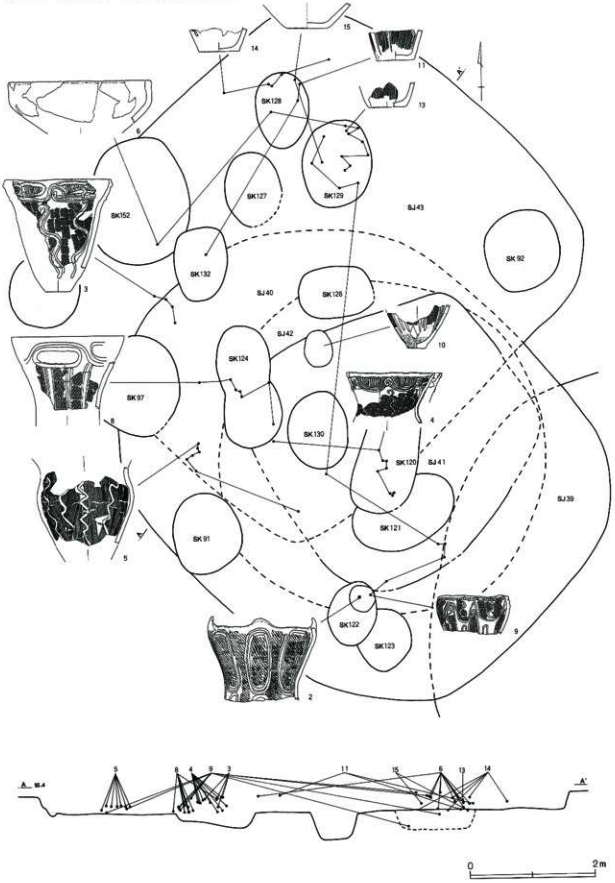
出土土器（第94図～第100図）

1は第43号住居跡の炉体土器である。口縁部から胴部中段のくびれの部分までが残存する。軽微に内湾しつつ緩やかに開く水平口縁で、内面に隆帯が巡らせて段を構成し、口端上に斜め方向の刻みが施される。口端部に渦巻き状の粘土紐を貼りつけた小突起を配し、ここから頸部にかけて波状の浮線文が垂下する。突起と突起の間には棒状工具による重弧文が描かれる。口縁部と胴部との境は平行沈線によって区画され、この沈線の上に重複して波状の浮線文が巡る。地文は縦位の条線である。現存高9.8cm、口径25.4cmを測る。

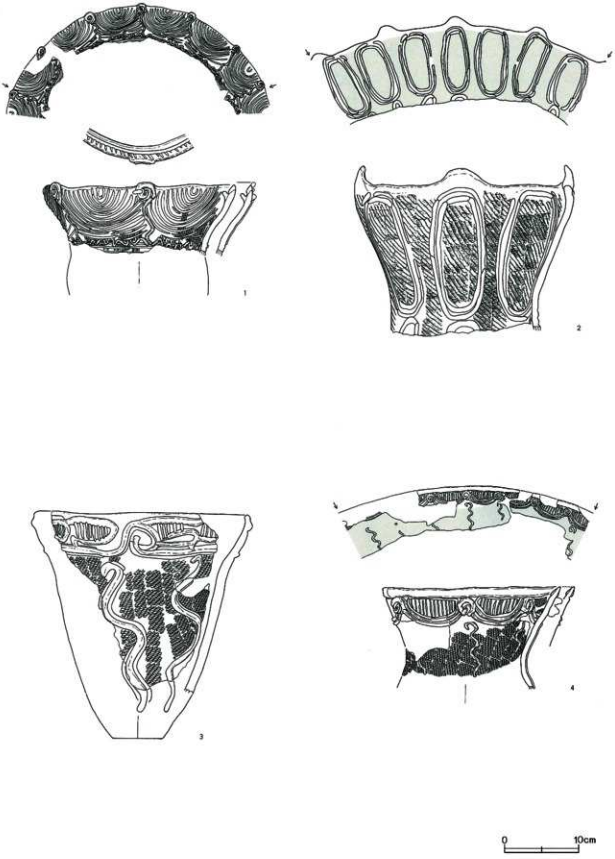
2は第42号住居跡の埋甕である。口端に4単位の小突起を付する深鉢形土器で、胴下半部を欠失する。

胴部中段のくびれを境にして文様帯が上下に分割さ

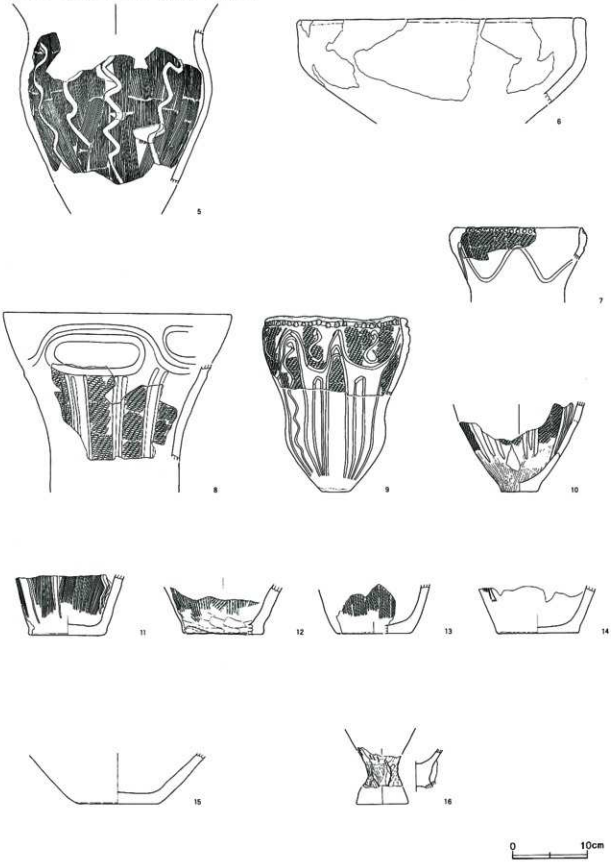
第93図　A区第40～43号住居跡遺物分布図



第94図　A区第40～43号住居跡出土土器（1）



第95図　A区第40～43号住居跡出土土器（2）



れている。胴上半部は二本沈線による楕円文が描かれ、平行沈線間の地文は磨り消される。胴下半部には単独の沈線による逆U字形の区画が描かれる。地文はL無節の縄文が縦位回転で施文される。現存高22cm、口径26cmを測る。

3はキャリパー類深鉢で、口縁から胴部中段にかけて残存する。口縁部には渦巻文を中心に隆帯による楕円区画が形成され、内部に縦位の集合沈線が充填される。胴部には隆帯による蛇行懸垂文が垂下するが、隆帯の上端はわらび手状にフックしており、口縁部文様帯に接続しない。胴部の地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。現存高23.4cm、口径28cmを測る。

4は繋弧文の深鉢である。胴部に強いくびれを持ち、口縁部に向けてほぼ直線的に開く。断面先細りの二重口縁で、内面稜を成す。口縁直下に二本隆帯による繋弧文が描かれ、区画内部には縦位の集合沈線が充填される。胴部には3の個体に類似する蛇行懸垂文がみられる。現存高13.4cm、口径23.9cmを測る。

5は深鉢胴部で、半裁竹管状工具による蛇行懸垂文がやや不規則に配置される。地文は擬歯状工具による条線が縦位に施文される。現存高20.4cm、最大径25.9cmを測る。

6は無文の浅鉢である。直線的に開いた胴部が胴部中段でくの字に屈曲し、口縁はほぼ垂直に立ち上がっている。現存高11cm、口径38.7cmを測る。

7は吉井城山類の小型深鉢の口縁部である。口縁直下に棒状工具先端による列点が巡り、同上半部には大波状の沈線区画が描かれる。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。現存高4.3cm、口径16.6cmを測る。

8はキャリパー類の深鉢胴部である。口縁部には楕円の沈線区画が描かれ、胴部には幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。現存高12.8cm、最大径25.8cmを測る。

9は吉井城山類の小型深鉢で、胴下半部を欠失する。口縁直下に1条の沈線が巡り、この沈線に沿って棒状工具先端による列点が巡る。同上半部には大波状の沈線区画が描かれ、区画内には両端閉塞したわらび手沈線が描き込まれる。波状区画の下端は磨消し懸垂文と連結する。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。現存高10.4cm、口径17.4cmを測る。

10は深鉢胴下半部である。3本一組の沈線による磨消し懸垂文が施文され、底部付近には縦位の磨きが徹底される。地文はRL単節の縄文である。現存高11cm、最大径17.8cm、底径4.6cmを測る。

11～14は深鉢底部である。11は擬歯状工具による条線を地文に持ち、半裁竹管状工具による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に配される。その他は地文のみの個体で、12は擬歯状工具の条線、13は撚糸文、14は半裁竹管状工具の集合沈線をそれぞれ地文とする。

15は無文の浅鉢底部である。16は台付土器で、底部と脚台部の接続部分である。正面とおぼしき1カ所に断面台形の粘土塊の貼り付けがみられるが、これが何らかの文様の一部をなすものかは不明である。

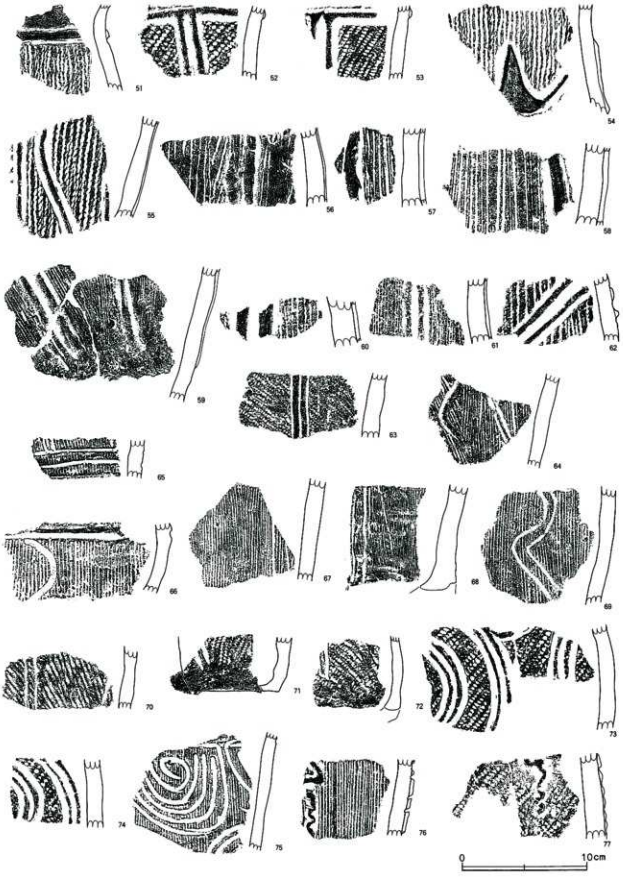
17～20は勝坂系の破片である。17は土器の把手と思われるものである。扁平な橋梁状の把手であるものと思われ、中央にひれ状の突起を伴っている。棒状工具による集合沈線が全面に施文され、一部に刻みを伴う扁平な隆帯がみられる。18は無文地に沈線文の描かれる胴上半部と地文のみの胴下半部の間を、交互刺突を伴う小波状の浮線文によって区画するものである。19は刻みを伴う隆帯による三角形区画、20は両側に沈線によるなぞりを加えた浮線文である。

21～50はキャリパー類深鉢の口縁付近の破片であり、中期後葉から末葉までの各時期のものを一括して掲載した。51～62は隆帯懸垂文の胴部である。二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配置されるものと思われる。54は大柄の剣先状モチーフがみられる。65～72は沈線による懸垂文で、66が単独の沈線による蛇行懸垂文であるほかは、いずれも半裁竹管状工具による平行沈線文が描かれる。

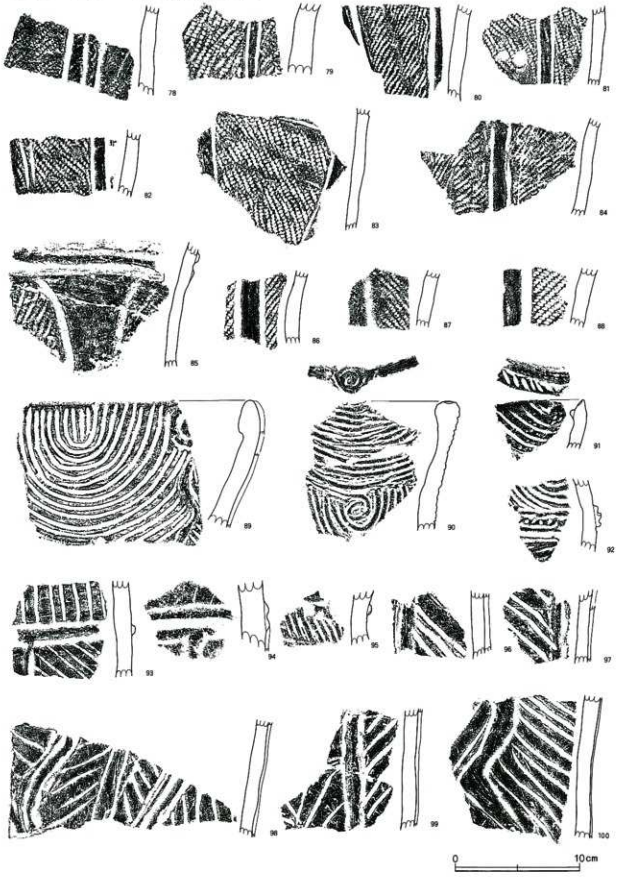
73・74は半裁竹管状工具による渦巻文で、唐草文系の個体であると思われる。75は横位の沈線区画下に棒状工具による弧線文が重畳し、中央に渦巻文が描かれ

第96図　A区第40～43号住居跡出土土器（3）

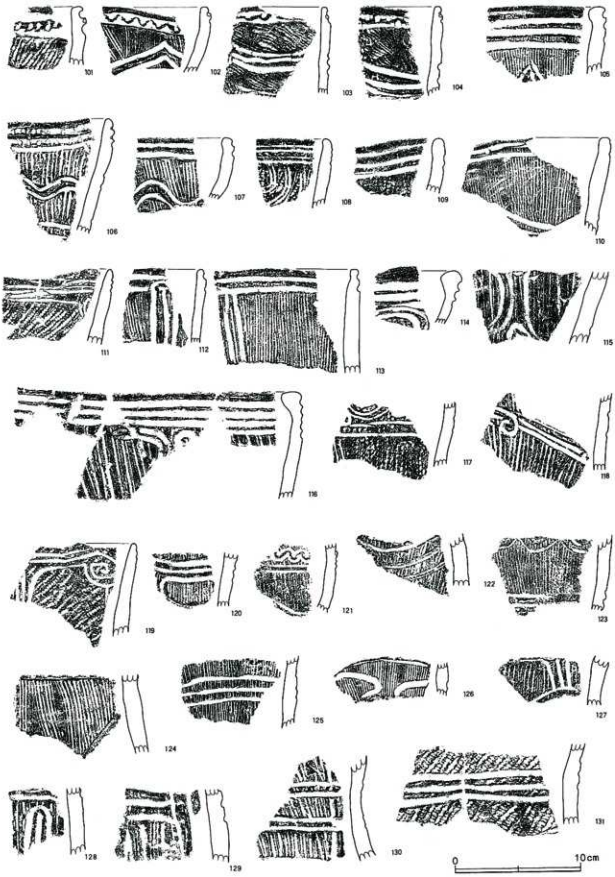
第97図　A区第40～43号住居跡出土土器（4）



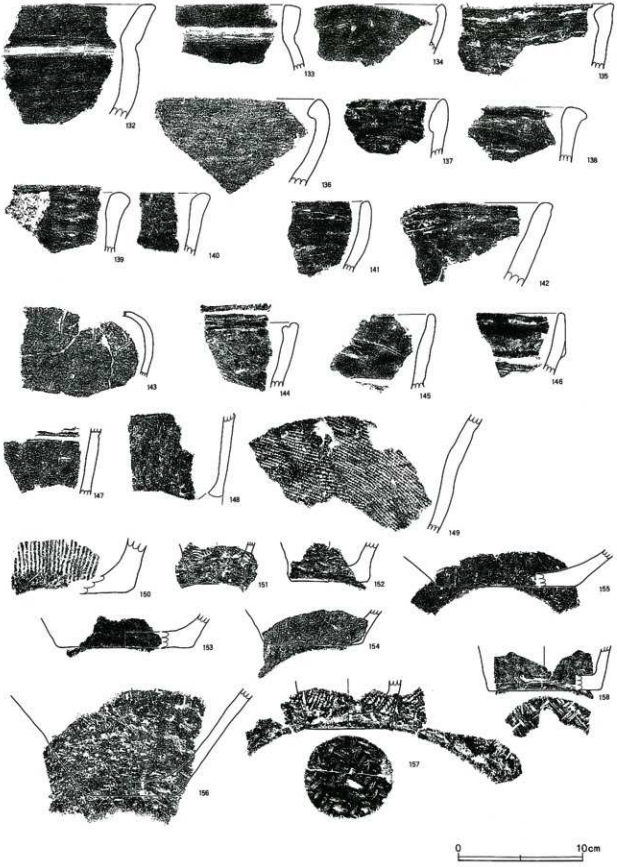
第98図　A区第40～43号住居跡出土土器（5）



第99図　A区第40～43号住居跡出土土器（6）



第100図　A区第40～43号住居跡出土土器（7）



る。基本的に連弧文系の個体で、唐草文のイメージを取り込んだものであろう。76・77は小波状の浮線文が垂下する胴部である。

78～88は磨消し懸垂文の胴部である。85は口縁部文様帯と胴部の境を２本の隆帯によって区画する。89～92は曽利系の個体で、重弧文が施文される口縁部周辺の破片である。89・91は水平口縁、90は山形の波状口縁である。93～100は胴部に隆帯懸垂文が垂下し、綾杉状の集合沈線を地文とする個体である。

101～131は連弧文系の土器を一括した。102のように口縁直下に交互刺突列を持ち、弧状モチーフの接点が山形に切れ上がる定型的な連弧文土器はごくわずかで、106・107のように連弧文が波線化したり、115にみられるような対弧状の沈線によって連弧文と横位区画線ないし連弧文同志が上下に連結される、果ては129・130のように横位の区画と縦位の区画線が交差して窓枠状の区画が構成されるなど、大半の土器がモチーフに崩れを生じている点が指摘し得る。ただし、明らかな磨消し連弧文は存在しないようである。

132～142は無文の口縁部である。132・133は胴張りの浅鉢、それ以外は浅鉢と深鉢に属するものが混在するものと思われる。143は胴張り浅鉢の胴上半部、144は深鉢口縁部と思われるもので、口端上に沈線が巡る。145・146は深鉢口縁部で、145は１条の沈線が巡り、146は扁平な隆帯により段を構成する。147は無文地に横位の平行沈線が巡る胴部、148は無文の胴下半部である。

149は縄文のみ施文される胴部である。ＬＲ単節の比較的緻密な縄文がわずかに間隔をおいて縦位に施文されるもので、後期初頭に下る可能性がある。

150以下には底部破片を一括した。150は撚糸文、151はＬＲ単節の縄文が施文される。152～156は無文の底部で、152（154も？）は深鉢、その他は浅鉢か両耳壷に伴うものと思われる。

157・158は底面に網代の圧痕が残るもので、後期段階に下るものと思われる。

第44号住居跡（第101図～第113図）

Ｄ－５区に所在する。第31・137・139号土壙を切るほか、第140・143号土壙を切るものと思われる。また、第136・138・142・157・172・173号の各土壙とも切り合い関係にあるが、これらの遺構と本住居跡との新旧関係は明らかでない。

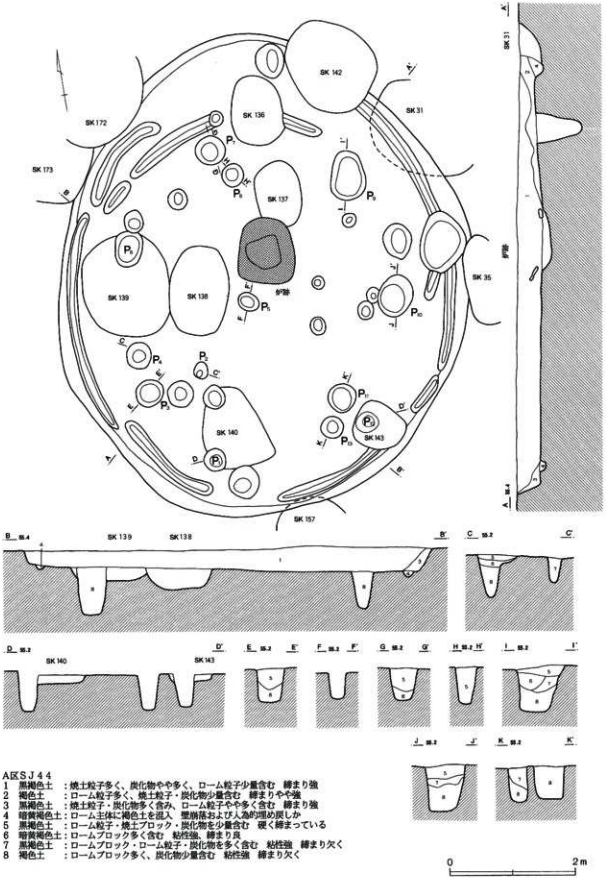
楕円形の住居跡で、長径7.7ｍ、短径6.5ｍを測る。主軸方向はＮ－12.5°－Ｅを指す。壁高は残りの良い部分で38cmを測る。床面はほぼ平坦だが、北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。壁溝は北壁付近で部分的な重複を示し、それ以外では数カ所の空白をはさみつつも基本的には１巡している。したがって、本住居跡は少なくとも１回の拡張を経験していることになる。

床面からは多数のピットが検出されているが、図中Ｐ１～Ｐ13は炉跡に近接するＰ５を除いた12本が本住居跡の主柱穴であると思われる。これらのうちＰ３・４、Ｐ７・８、Ｐ11・12・13などは住居跡の建て替えに伴う新旧の各時期の柱穴である可能性が強く、住居本来の柱穴配置は壁から一定の距離をおいて６～８本の主柱穴が巡るものであったと考えられる。柱穴の深さは30～80cmである。住居への出入り口を思わせる施設の痕跡は確認できなかった。

炉跡は床面中央から若干北に寄った地点に所在する。隅丸方形の石囲炉で、長径1.2ｍ、短径92cm、深さ25cmを測る。長径30～50cmの礫を用いて三方を囲うが、北縁の一カ所と南縁では石材を欠いている。南縁の中央で床面から若干浮いた状態で石皿片が出土した。これは縦二分割された大型の石皿の一片（第294図）が、さらに横二分割された状態で出土したもので、表面に被熱の痕跡がみられたため、この石皿片が炉石の一部として転用されていた可能性が高い。

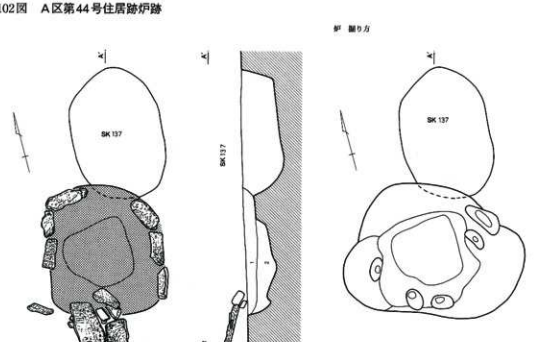
本住居跡からは前述の石皿以外にも多数の遺物が出土した。大半が縄文時代中期後半に属する土器片である。復元個体としては床面上に伏せられた状態で出土した２個体の大型深鉢口縁部（第104図１・２）の存在が目を引く。

第101図　A区第44号住居跡



A区SJ44
1　黒褐色土　：桃土粒子多く、炭化物やや多く、ローム粒子少量含む　締まり強
2　褐色土　：ローム粒子多く、焼土粒子・炭化物少量含む　締まりやや強
3　黒褐色土　：焼土粒子・炭化物多く含み、ローム粒子やや多く含む　締まり強
4　暗黄褐色土：ローム主体に褐色土を混入　壁崩落および人為的埋め戻しか
5　黒褐色土　：ローム粒子・焼土ブロック・炭化物を少量含む　硬く締まっている
6　暗黄褐色土：ロームブロック多く含む　粘性強　締まり良
7　黒褐色土　：ロームブロック・ローム粒子・炭化物を多く含む　粘性強　締まり欠く
8　褐色土　：ロームブロック多く、炭化物少量含む　粘性強　締まり欠く

第102図　A区第44号住居跡炉跡



出土土器（第104図～第113図）

1は床面直上に伏せられた状態で出土したキャリパー類の大型深鉢土器で、胴部中段以下を欠失している。

隆帯による渦巻文を起点として左右に長楕円形の隆帯区画が配される。5単位配されるこの楕円形区画のうち1区画のみ中央に隆帯による三角形のモチーフが配置されるが、これは入り組みモチーフの末端にしばしばみられる剣先状のモチーフの転化したものであろう。

頸部は幅広の無文帯となり、胴部との境は2本一組の隆帯によって区画される。胴部には二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配置される。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

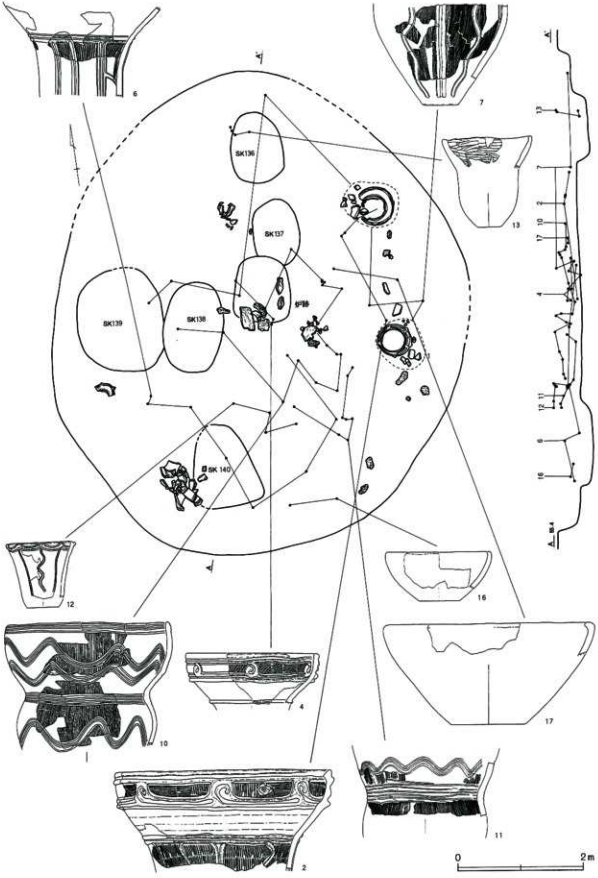
2も1と同様床面直上で逆位に出土したもので、キャリパー類の大型深鉢土器である。胴部中段以下および口縁の一部を欠失する。口縁部文様帯は入り組み状の渦巻モチーフが7単位配され、さらに1カ所に剣先状のモチーフが配される。

頸部は幅広の無文帯となり、かすかに輪積み痕が観察される。胴部との境は2本一組の隆帯によって区画される。胴部には二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配置される。地文は撚糸文で、胴部では縦位回転、頸部では横位と縦位の回転が交錯している。両者が重複する場合、基本的に縦位回転が横位回転を切って施文されている。

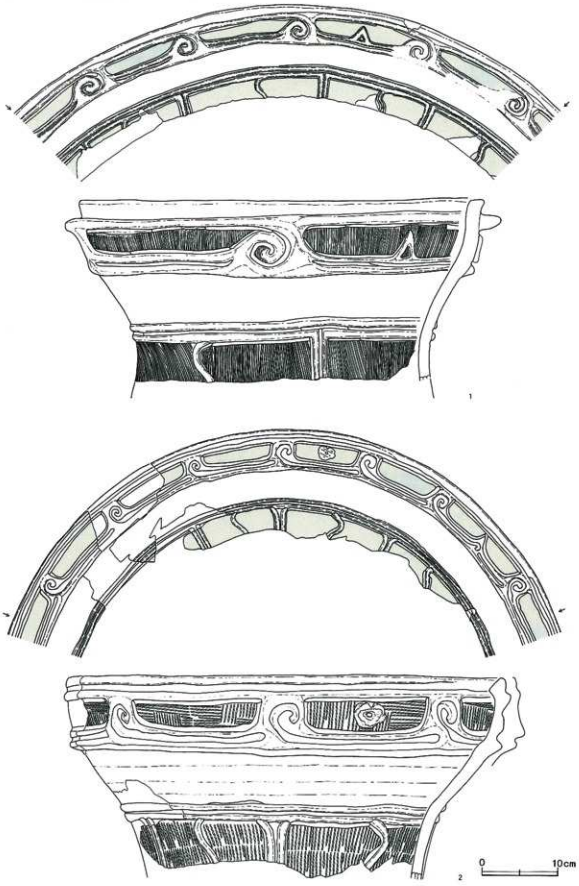
本資料は口縁部の一カ所に外面からの加撃による穿孔が観察された。

3は床面直上で横につぶれた状態で出土したものである。キャリパー類の大型深鉢で、口縁から胴部中段にかけて部分的な欠落がみられるほかはほぼ完形の個体である。6単位の小波状口縁で、1・2と比べ幅狭の口縁部文様帯を有する。隆帯による入り組み状の渦巻文が不規則に配され、口縁部区画をさらに小単位の楕円形区画へと細分している。また、口端上にも同様の渦巻文が巡る。頸部無文帯を有し、胴部との境は2

第103図　A区第44号住居跡遺物分布図

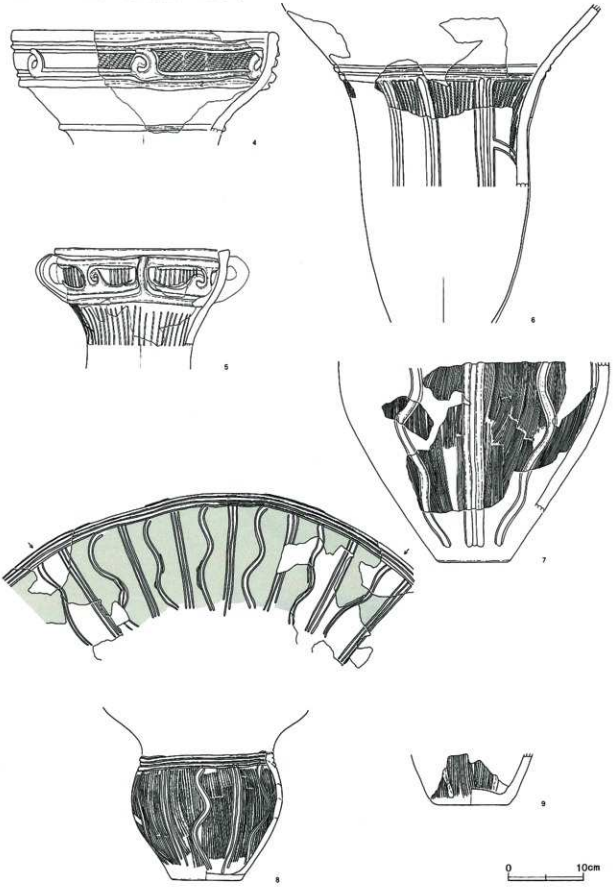


第104図　A区第44号住居跡出土土器（1）



第105図　A区第44号住居跡出土土器（2）

第106図　A区第44号住居跡出土土器（3）



本一組の隆帯により区画される。胴部には二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配される。

地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。本遺跡出土資料中最も巨大な個体である。

4はキャリパー類深鉢口縁部である。口縁部区画内に隆帯による小渦巻が配され、頸部無文帯を有する。地文はＲＬ単節の縄文が縦位回転で施文される。

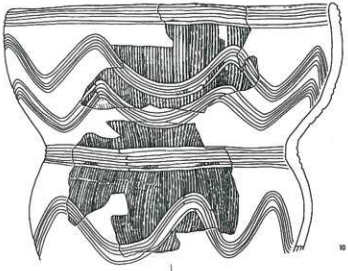
5はキャリパー類深鉢で、口縁から胴上半部までが残存する。口縁部区画の上下をつなぐかたちで、橋梁状の把手が4単位配されるものと思われる把手同志の中間地点には隆帯渦巻が配される。頸部無文帯はみられない。地文は棒状工具による縦位の集合沈線である。

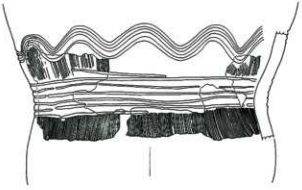
6はキャリパー類深鉢の頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部無文帯を持ち、胴部との境を二本隆帯により区画する。胴部には二本隆帯の懸垂文が垂下するが、この懸垂文は部分的に枝分かれして唐草文由来の渦巻文を描くものと思われる。地文は縦位の撚糸文である。

7はキャリパー類深鉢の胴下半部である。二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配される。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

8もキャリパー類深鉢で、頸部から上を欠失する。胴部と頸部の境は半裁竹管状工具による平行沈線で区画される。同じ工具による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に配される。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

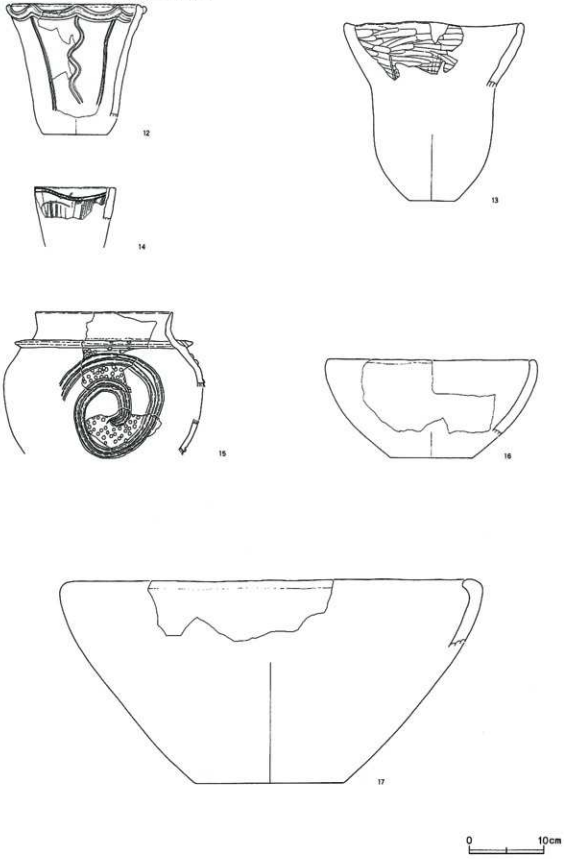
第107図　A区第44号住居跡出土土器（4）





0　10cm

第108図　A区第44号住居跡出土土器（5）



9はキャリパー類深鉢の底部である。隆帯による懸垂文がみられ、櫛歯状工具による縦位の条線を地文とする。

10は連弧文系の大型深鉢で、口縁から胴下半にかけて断片的に残存するものである。胴部中段にくびれを有し、上下が球胴状に膨れる。口縁直下および胴部中段に平行沈線による区画が巡る。三本沈線による波線化した連弧文が胴上半部には2段、胴下半部には1段のみ描かれる。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

11も連弧文系の深鉢であるが、10に比べ器形に変化が乏しく、胴部中段に若干のくびれを帯びるものの、比較的直線的に開いて口縁に至るものと思われる。胴部中段には平行沈線による区画が巡り、胴上半部には波線化した連弧文が描かれる。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

12は朝顔形に開く深鉢で、口縁から胴下半部にかけて残存する。口縁直下に繋弧文が巡り、胴部には半裁竹管状工具による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に配される。地文は施文されない。

13は無文の深鉢で、頸部から口縁にかけて直線的に開き、口端部で軽微に内屈する。全面に横方向の削り、もしくは箆状工具によるごく荒いなで調整とみられる痕跡が残される。胴部中段には荒い縦位の研磨が施される。

14は小型の深鉢口縁部である。直線的に立ち上がるコップ形で口唇平坦、器壁は厚手で内面に輪積み痕を残す。口縁直下に半裁竹管状工具による結節沈線が巡り、胴部には同様の工具による縦位に集合沈線が施文される。

15は有孔鍔付き土器で、口縁部から胴部中段にかけて断片的に残存する。口縁は無文で軽微に外反し、頸部に断面三角形の有孔鍔が巡る。胴上半部がくの字形に張り出し、胴下半部にかけて緩やかなカーブを描いてすぼまる。胴部いっぱいに唐草文由来の大柄な隆帯渦巻文が描かれ、空隙に円形竹管状工具の先端を用いた円形刺突が充填される。

16は無文の浅鉢で、口縁から胴下半部にかけて残存する。緩やかに内湾する椀形の浅鉢で、口縁はほぼ直立する。

17は無文浅鉢の口縁部である。口端がくの字に内屈する以外は器形等16の個体に近いものと思われる。

18～28は勝坂系の個体である。18は円筒形の深鉢である。口端平坦で断面逆台形を呈し、胴部との境を1条の隆帯で区画する。胴部には刻みを伴う隆帯によって三角形の区画が構成されるものと思われる。19はキャリパー形の深鉢の口縁部文様帯である。刻みを伴う隆帯によって入り組み状の文様が描かれる。空隙には肉彫り状の沈線によって三叉文などのモチーフが充填される。

20・21は18の個体に似た深鉢であると思われる。波状の隆帯によって三角形の区画が構成される。21はソロバン玉状に張り出す胴下半部である。22～25は胴部の文様帯で、刻みを伴う隆帯によって文様が描かれ、空隙に三角印刻や三叉文などが充填される。26は胴上半部の文様帯と胴下半の地文部を区画する横位の隆帯がみられる。地文はＲＬ単節の縄文で、０段多条であるかもしれない。

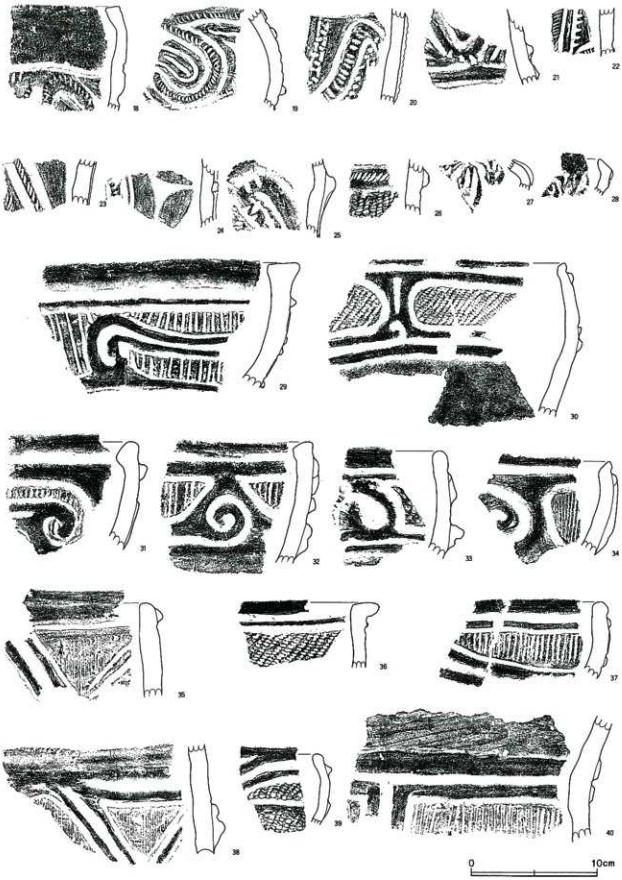
27は深鉢口縁部である。波状の隆帯をはさんで櫛歯状の浮線モチーフが交互に配置される。28はくの字に内屈する口縁で、やはり類似の浮線モチーフがみられる。

29～39・48・49はキャリパー類深鉢の口縁部である。一本ないし二本隆帯による渦巻文や入り組み文が描かれる。35・38は口縁部区画内に二本隆帯による鋸歯状のモチーフが描かれる。48・49は同一個体の可能性がある。口縁部文様帯が極端に圧縮されるもので、3の個体に似た構成をとるものと思われる。

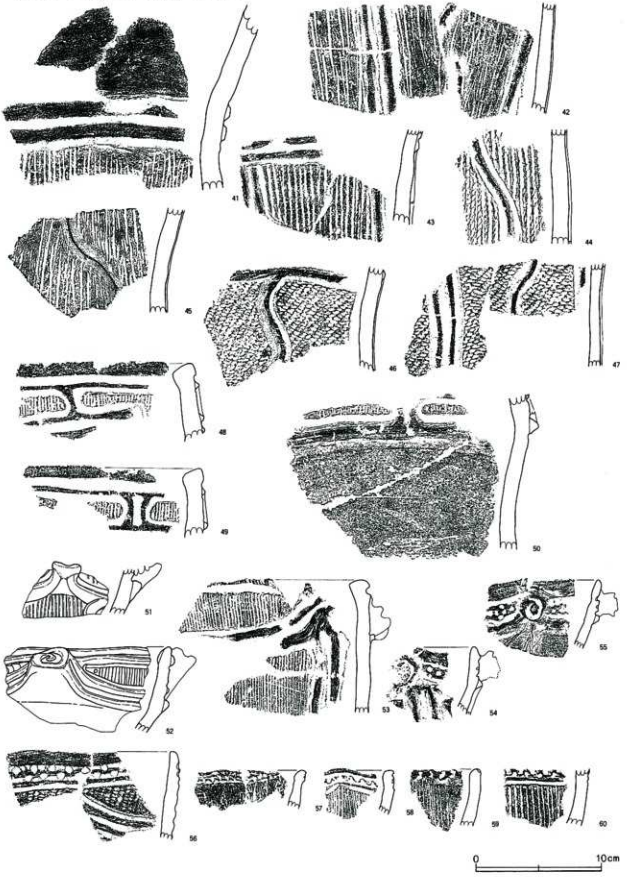
40・41・50は口縁部無文帯を含む破片である。上下を1本ないし2本の隆帯によって区画する。

51～53は繋弧文の口縁部である。52は頸部無文帯を持ち、51・53は繋弧モチーフに直に隆帯懸垂文が接続する。54・55は繋弧文に類似の個体で、口縁部の渦巻文がボタン状に突出する。口縁部区画内には円形刺突

第109図　A区第44号住居跡出土土器（6）



第110図　A区第44号住居跡出土土器（7）



文が充填される。

56～74は連弧文系の土器群である。56～59は交互刺突文が巡る口縁部である。60は口縁直下の破片でやはり交互刺突文が巡る。61は胴部中段のくびれの部分で、横位の平行沈線区画の間隙に刺突列が巡る。62～66は弧線モチーフの巡る胴上半部である。67～72は磨消し連弧文が施文される破片である。67・68は弧線モチーフと胴部中段の区画との間が対弧状の沈線によって連結される。70はこの区画線を起点として胴下半部に懸垂文が垂下する。73・74は区画の上下に襷状の平行沈線が描かれて三角形の区画を構成し、三角形の頂部から2本一組の蛇行沈線が垂下する。

75～83も連弧文系の土器ある。口縁直下に二本沈線による連弧モチーフが巡る。地文は棒状工具による集合沈線文である。80～82は半裁竹管状工具によって連弧文を描く個体である。横位の区画線によって器面が多段に区画され、この中に連弧モチーフが描き込まれる。地文も同じ工具による集合沈線である。83は水平口縁上に三角形の小突起が付されるもので、口縁直下に細手の半裁竹管状工具による平行沈線が巡り、胴部にも平行沈線による蛇行懸垂文が垂下する。沈線間には同一工具の先端を用いた刺突が施される。地文は櫛歯状工具の条線である。

84～86は半裁竹管状工具による重弧文の描かれる口縁である。同一個体の可能性があるもので、モチーフの接点には同一工具によるわらび手状の平行沈線が垂下する。

87は口縁直下に1条の隆帯が巡り、口端と隆帯との間に渦巻文を中心とした口縁部文様帯を持つ。地文は半裁竹管状工具による斜位の集合沈線である。本来重弧文の施文される口縁部にキャリパー類のイメージが取り込まれたもので、頸部には無文帯が存在する。

88は二本隆帯による唐草文が全面に展開する胴部である。隆帯上面には半裁竹管状工具内面を用いたなぞりが加えられる。地文は同一工具による縦位の集合沈線である。

89は内湾する深鉢口縁部である。口端外面に1条の隆帯と沈線が巡り、重弧文が描かれる。

90・91は曽利系の深鉢頸部で、交互刺突を伴う隆帯で上下を区画した中に籠目文が描かれる。

92・93も深鉢頸部の区画である。92は幅広の隆帯上に平行沈線と刺突列が巡る。93は半裁竹管状工具による平行沈線の上に波状の浮線文が巡る。地文はいずれも半裁竹管状工具の集合沈線であり、93は口縁部に重弧文が描かれる。

94はくの字に内屈する口縁部である。口縁内面にまで連続する縦位の平行沈線が描かれ、沈線間に波状の浮線文が垂下する。

95は半裁竹管状工具内面のなぞりを伴った扁平な隆帯によってJ字状にフックする懸垂文が描かれる。地文は櫛歯状工具の条線である。96は類似の隆帯によって渦巻文が描かれる。地文はLR単節の縄文で、モチーフ間に充填される。

97は無文の浅鉢である。口縁は肥厚しつつ外屈し、胴部との境に段を構成する。98～100も無文浅鉢口縁部で、単純に肥厚しつつ内湾する。100は頸部でくの字に内屈する。101～103は胴上半部の文様帯を持つ浅鉢である。口縁は外反し、胴下半部は無文である。

104～106は無文の口縁部で、口唇直下に隆帯＋沈線で段が形成される。

107は縦位の隆帯が垂下し、地文として半裁竹管状工具による横位の平行沈線が重畳する。108・113は横位の平行沈線のみの胴部である。

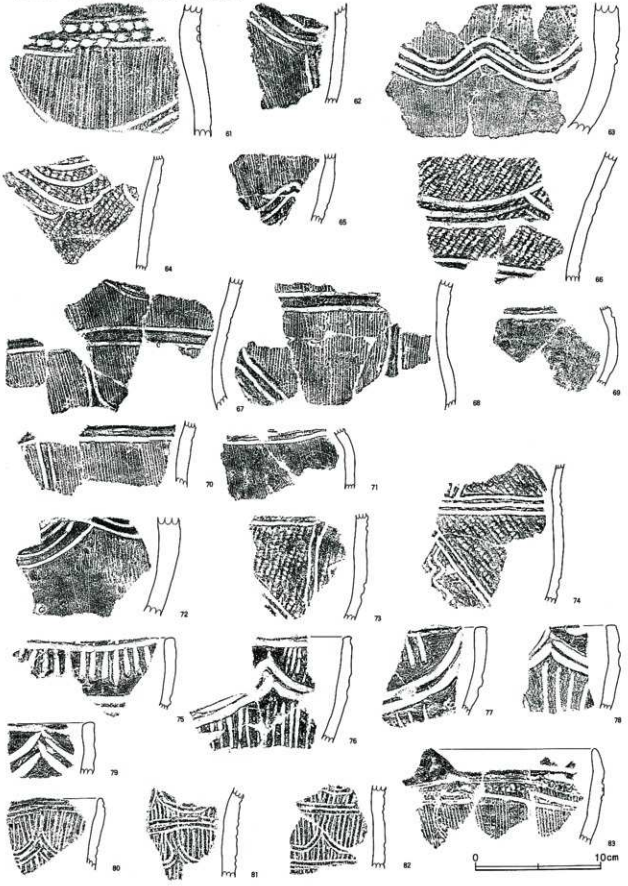
109・110は刻みを伴う縦位の隆帯が垂下する胴部で、地文は縦位の条線である。111は地文縄文で小波状の隆帯が垂下する。

112は直立する口縁で、口唇断面角頭棒状を呈する。頂部の平坦な縦位の隆帯に沿って棒状工具による沈線が垂下する。

114は縦位の条線、115は縄文のみの深鉢口縁である。116は条線のみの胴部である。117～119は地文条線の底部である。

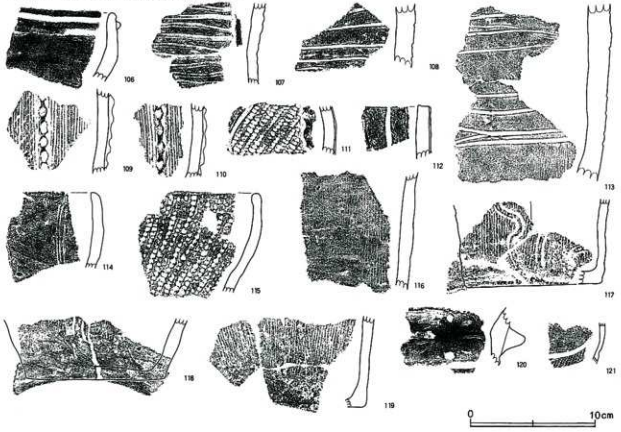
120は有孔鍔付土器、121は後期初頭の称名寺式である。

第111図　A区第44号住居跡出土土器（8）



第112図　A区第44号住居跡出土土器（9）

第113図　A区第44号住居跡出土土器（10）



A区第45号住居跡（第114図～第116図）

E－5区に所在する。第31・79・80号の各土壙に切られる。このほか、第87・90号の各土壙とも切り合い関係にあるが、両者との新旧関係は明かでない。不整な隅丸長方形を呈し、長径4.48m、短径4.1mを測る。主軸方向はN－47.5°－Eを指す。

壁高は残りの良い部分で32cmを測る。壁溝は検出されなかった。床面上から6本のピットが検出されている。いずれも小規模で、最大のものも深さ30cmを越えない。切り合いによって失われた部分も大きく、本住居跡の柱穴配置は不明である。炉跡は検出されなかったが、これも切り合いによって失われた可能性が高い。

遺物は縄文時代中期後葉の土器片が出土している。

出土土器（第115図・第116図）

1は磨消し連弧文の深鉢である。胴下半部を欠失する。磨消しを伴う平行沈線によって文様が描かれる。口縁直下に平行沈線が巡り、胴部中段にも平行沈線が巡って文様帯が上下2段に分帯される。胴上半部は磨消し連弧文が描かれる。地文は縦位の条線である。口径33cm、現存高16.2cmを測る。

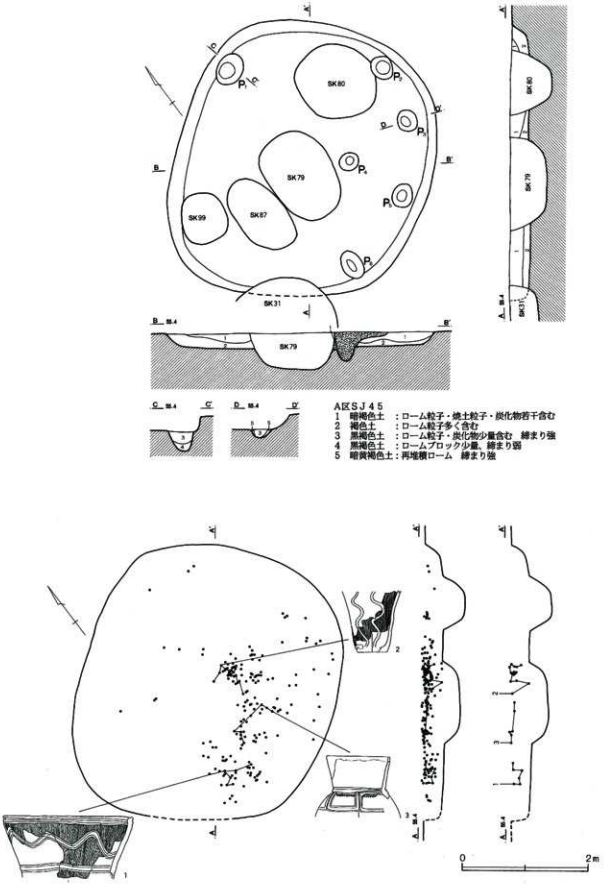
2は深鉢胴下半部である。半裁竹管状工具による平行沈線で蛇行懸垂文が描かれる。地文は縦位の条線である。現存高16.3cm、底径7.7cmを測る。

3は長頸壺形土器で、頸部から胴上半部にかけての部分が残存する。頸部と胴部の境は1条の隆帯によって区画され、胴上半部に窓枠状の隆帯区画が構成され、内部にRL単節縦位回転の縄文が施文される。

4～6はキャリパー類深鉢の口縁部である。4は二本隆帯によるクランク文が描かれる。2は渦巻文がみられる。3は繋弧文で、弧状モチーフの接点に渦巻文をもつ小突起が配される。地文は弧状モチーフによる区画内部には縦位の短沈線が充填され、頸部以下には縦位の撚糸文が施文される。

7・8はキャリパー類の口縁部文様帯の一部である。7は渦巻文がみられ、頸部との間を1条の隆帯によって区画する。8も同じく頸部との境界部分の破片

第114図　A区第45号住居跡



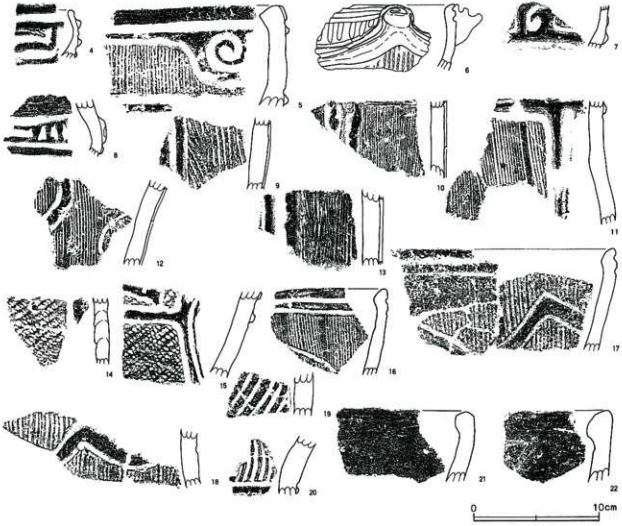
第115図　A区第45号住居跡出土土器（1）

であるが、浅鉢胴上半部の文様帯である可能性もある。9～14は隆帯の懸垂文が垂下する胴部である。12は蛇行懸垂文、それ以外は二本隆帯の懸垂文である。

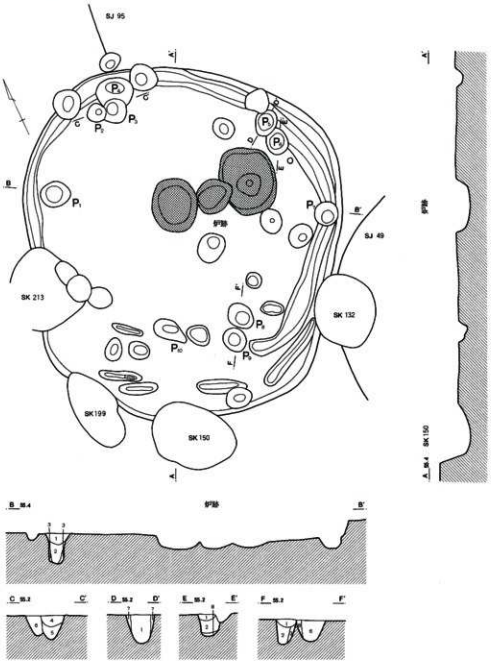
15は唐草文が描かれる胴部である。地文はＲＬ単節の縄文で、縦位回転で施文される。

16～18は磨消懸垂文の口縁及び胴上半部である。19・20は重弧文の描かれる頸部である。胴部との境は１条の隆帯によって区画される。21・22は無文の口縁部である。浅鉢ないし曽利系の深鉢に伴うものであろう。

第116図　A区第45号住居跡出土土器（2）



第117図　A区第46号住居跡



A区ＳＪ４６

1　暗褐色土　：ローム粒子微量、焼土粒子微量、炭化物粒子ごく微量含む　締まり強

2　黒褐色土　：ローム粒子やや多く、焼土粒子・炭化物微量含む　締まり強

3　褐色土　：ロームブロック多く、ローム粒子やや多く、焼土粒子・炭化物微量含む　締まり強

4　暗褐色土　：ロームブロック若干、ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物微量含む　締まり強

5　褐色土　：ロームとの混土　締まり弱　人為的埋め戻しか

6　黒褐色土　：ロームブロック多く含み、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量含む　締まりやや強

7　黄褐色土　：ローム主体に若干の褐色土を含む　締まりやや強　人為的埋め戻しか

8　暗灰褐色土：多量のロームを含む　人為的埋め戻しか

0　2m

A区第46号住居跡（第117図～第123図）

E－5・6、F－5・6区に所在する。第95号住居跡を切っているほか、第132・150・199・213号の各土壙とも重複関係にあるが、それらとの新旧関係は明かでない。北東側にやや開いた不整逆台形を呈し、長径5.6m、短径5mを測る。壁高は残りの良い部分で25cmを測る。主軸方向はN－25.5°－Eを指す。

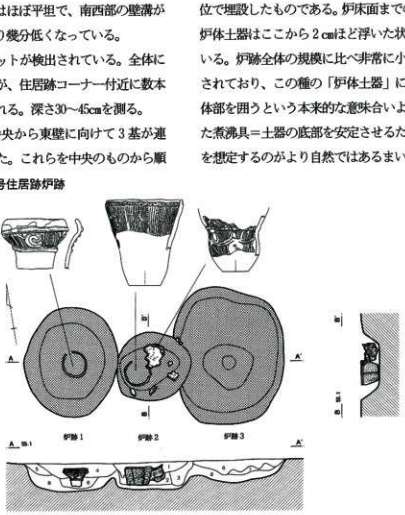
壁溝は基本的に1巡であるが、南西辺で重複がみられ、建て替えにともなってこの方向への拡張がなされたものとみられる。内周と外周の壁溝の間隔は80～90cmで、内周壁溝のプランは北西－南東方向に長い隅丸長方形を呈する。床面はほぼ平坦で、南西部の壁溝が重複する部分では他より幾分低くなっている。

床面上から多数のピットが検出されている。全体に雑然とした分布であるが、住居跡コーナー付近に数本が集中する傾向はみられる。深さ30～45cmを測る。

炉跡は壁溝内周の中央から東壁に向けて3基が連なった状態で検出された。これらを中央のものから順に炉跡1・2・3と命名した。土層断面上では炉跡2が炉跡1・3をそれぞれ切っており、後2者の新旧関係は明かでないが、住居跡プラン上での位置関係からみて、炉跡1が拡張前の旧段階の住居跡に、炉跡2が拡張後の住居跡にそれぞれ対応する可能性が高い。残る炉跡3については本住居跡に伴うものとするには位置的に不自然である。あるいは、本住居跡や第95号住居跡等に破壊された別個の住居跡に伴うものであるかもしれない。

炉跡1は埋甕炉である。長径86cm、短径72cmの楕円形の地床炉の中央に胴下半部を欠いた小型の深鉢を正位で埋設したものである。炉床面までの深さは22cmで、炉体土器はここから2cmほど浮いた状態で埋設されている。炉跡全体の規模に比べ非常に小型の土器が埋設されており、この種の「炉体土器」に関しては燃焼主体部を囲うという本来的な意味合いよりも、火にかけた煮沸具＝土器の底部を安定させるための支脚の機能を想定するのがより自然ではあるまいか。

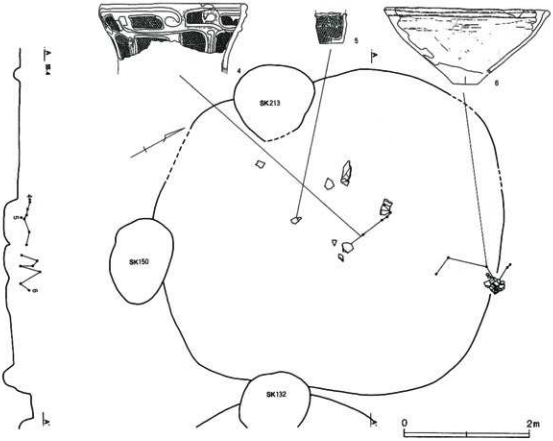
第118図　A区第46号住居跡炉跡



A区SJ46炉跡
1　黒褐色土　：ローム粒子・焼土粒子やや多く、焼土ブロック多く、炭化物微量含む　締まり強
2　暗黄褐色土：被熱した再堆積ローム
3　黒褐色土　：ロームブロック・ローム粒子多く含み、焼土粒子少量、炭化物微量含む　締まり強
4　黒褐色土　：ロームブロック多量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量含む　締まり強
5　黒灰褐色土：ローム粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒子少量、炭化物微量含む　締まり強
6　黒褐色土　：ローム粒子多量、ローム粒子やや多く、焼土粒子・炭化物微量含む　締まり強
7　暗黄褐色土：被熱した再堆積ローム　締まり弱
8　黄褐色土　：炉構築土　被熱した再堆積ローム　粘性あり、非常に堅く締まっている

0　1m

第119図　A区第46号住居跡遺物分布図



炉跡2も埋甕炉である。長径60cm、短径54cmの地床炉中に2個体の小型深鉢が埋設される。1点は胴部中段から下を欠き（第120図2）、もう1点は頸部から上と、胴下半部をそれぞれ欠失している（同図3）。やはり狭義の炉体というよりも支脚として機能したものであろう。炉床面までの深さは22cmで、炉体土器はやはりこの炉床面から数cm浮いた状態で埋設されている。

炉跡3は地床炉である。長径108cm、短径88cm、深さ18cmを測る。炉床中央にわずかなくぼみがみられる。炉体や炉石はみられない。

遺物は主として縄文時代中期後葉の土器が出土している。

出土土器（第120図～第123図）

1は炉跡1の炉体土器である。胴下半部と口縁の一部を欠失する。全体の構成はキャリパー類の深鉢を踏襲しているが、本来口縁部文様体の存在する部位が幅狭の無文帯となり、頸部無文帯に相当する部位の上下に1条の隆帯を巡らせて、ここに隆帯による渦巻文が描かれる。地文は棒状工具による縦位の集合沈線であり、部分的に矢羽根状や樹枝状の構成がみられる。

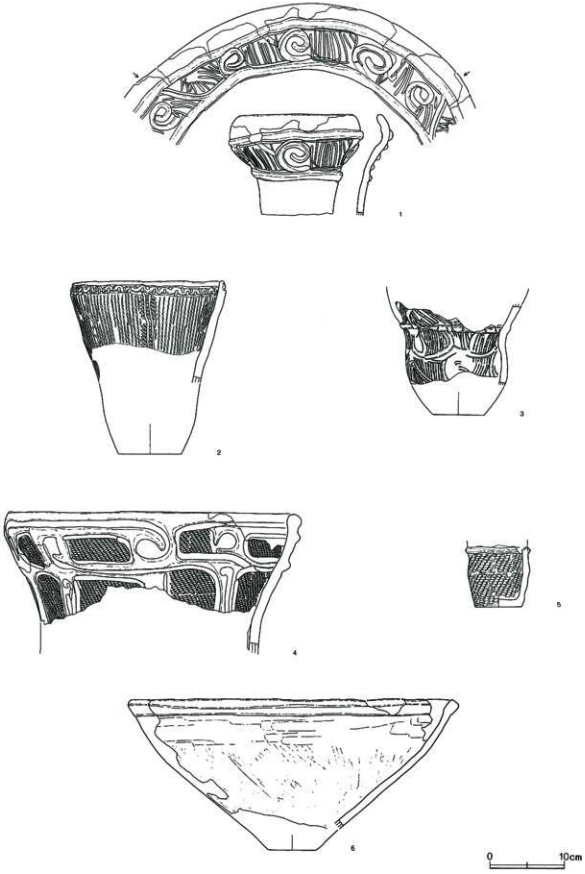
胴部は無文で、篦状工具による縦位の研磨が施される。

内面は胴下半部のみ縦位の研磨がみられるが、頸部から口縁にかけては輪積み痕や成形時の凹凸をそのまま残しており、この土器が煮沸具として機能し得たか疑わしい。

口径14cm、現存高13.6cmを測る。

2は炉跡2に埋設されていた炉体土器で、胴部から口縁にかけて直線的に開くコップ型の深鉢である。口縁直下に交互刺突を伴う平行沈線が巡るもので、連弧文系の個体である。胴部には平行沈線と1条の蛇行沈線による懸垂文が交互に配置される。地文は縦位の撚糸文で、平行沈線懸垂文の垂下する1カ所のみLR単

第120図　A区第46号住居跡出土土器（1）



節縦位回転の縄文が挿入される。口径19.5cm、現存高13.6cmを測る。

3も炉跡2に埋設されていたものである。曽利系の小型深鉢である。胴部中段にくびれを持ち、このくびれから若干上に刻みを伴う1条の隆帯が巡る。文様帯はこの隆帯を境として上下に分帯される。

頸部には半裁竹管状工具の平行沈線を用いた重弧文が描かれる。隣接する施文単位の間には1条の隆帯による蛇行懸垂文が垂下する。胴部は半裁竹管状工具による縦位の集合沈線を地文とし、同じ工具による曲線文が展開する。現存高11.2cm、最大径17.6cmを測る。

4はキャリパー類深鉢である。頸部から下を欠失する。水平口縁で、器形は比較的変化に乏しく、頸部から口縁にかけて緩やかに内湾しつつ開いている。口縁部文様帯は隆帯＋沈線による渦巻文が、互いに入り組みつつ横位に展開する。胴部の磨消懸垂文は逆U字形の区画文を構成し、無文部にはわらび手状の沈線が描かれる。地文はLR単節の縄文が、口縁・胴部の別なく縦位回転で施文される。

5は小型の円筒形深鉢である。全面にRL単節の縄文が縦位回転で施文され、破損部直下に横位の隆帯が巡る。本来、胴部中段に1条の隆帯を巡らせ、この区画から上に文様が展開していたものとみられる。表面にススの付着がみられる。最大径8.4cm、底径6cm、現存高8.4cmを測る。第295図2のミニチュア土器は本資料に寄り添うようにして出土したものである。

6は無文の浅鉢で、底部を欠いている。胴下半部から口縁部にかけて一本調子に開く擂鉢型で、胴上半部でわずかに内湾し、口唇は肥厚して外屈する。胴下半部に縦位から斜位の研磨が密に施される。口径推定43cm、現存高17cmを測る。

7～17は勝坂系の土器である。各種の隆帯により文様が描かれ、また交互刺突や三叉文が多用される。7は篦状工具による三叉文が描かれ、周囲に細密な集合沈線が描かれる。11は交互刺突を伴う平行沈線によって三角形や平行四辺形の区画が形成される。文様帯下端は刻みを伴う横位の隆帯によって区画され、胴下半部にはRL単節（0段多条？）の縄文が縦位回転で施文される。12は縦位の隆帯に矢羽根状の刻みが施される。また、交互刺突を伴うジグザグの隆帯がみられる。14は斜位の刻みを伴う断面台形の隆帯によって窓枠状の区画が構成され、内部に縦位の平行沈線が充填される。15・16・17は11に類似の破片で、文様帯下端を区画する横位の隆帯と、地文のみ施文される胴下半部である。地文は15・16が縦位の撚糸文、17がRL単節縦位回転の縄文である。18～22はキャリパー類深鉢の口縁部である。二本隆帯による渦巻文・入り組み文などが描かれる。

23は口唇直下に断面三角形の隆帯が巡る。口縁部文様帯は二本隆帯の襷状モチーフによって三角形や台形の区画が構成される。24は文様帯下端を区画する隆帯で、頸部に無文帯が存在する。25は頸部無文帯で、胴部との境を二本隆帯により区画する。

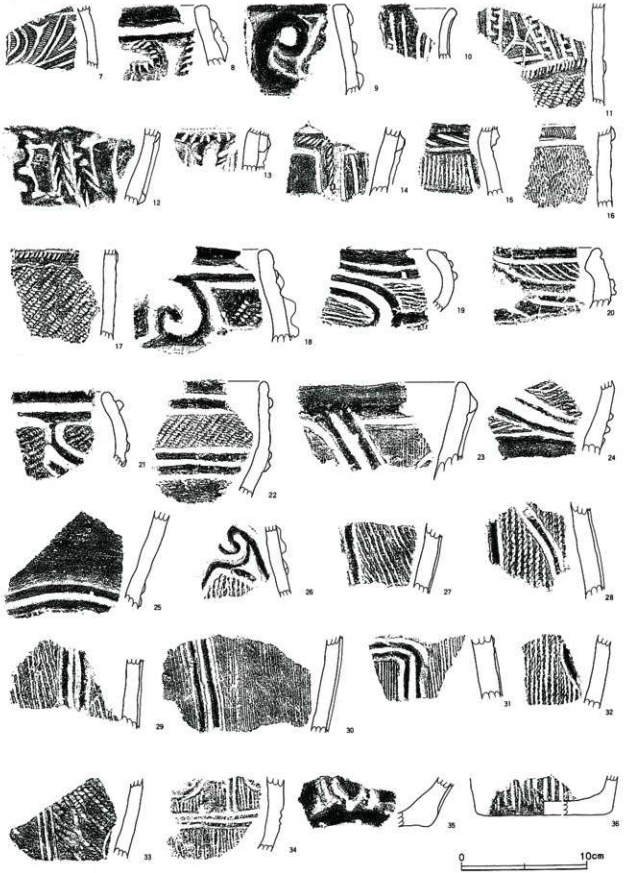
26～32は隆帯による懸垂文などが描かれる胴部破片である。26は二本隆帯のJ字、31はクランク状のモチーフが描かれる。33は半裁竹管状工具の平行沈線を用いた懸垂文と蛇行懸垂文が描かれる。34は半裁竹管状工具の平行沈線によって逆T字の区画が構成され、区画内部に弧線文が描き込まれる。35は隆帯懸垂文が垂下する底部である。36も底部で、3本一組の沈線が垂下する。

37・38は磨消懸垂文の描かれる胴部である。39は連弧文系の土器であろう。口縁直下に1条の隆帯が巡り、その上下に沿って交互刺突を伴う平行沈線が巡る。また、口縁内面にも1条の隆帯が巡っている。

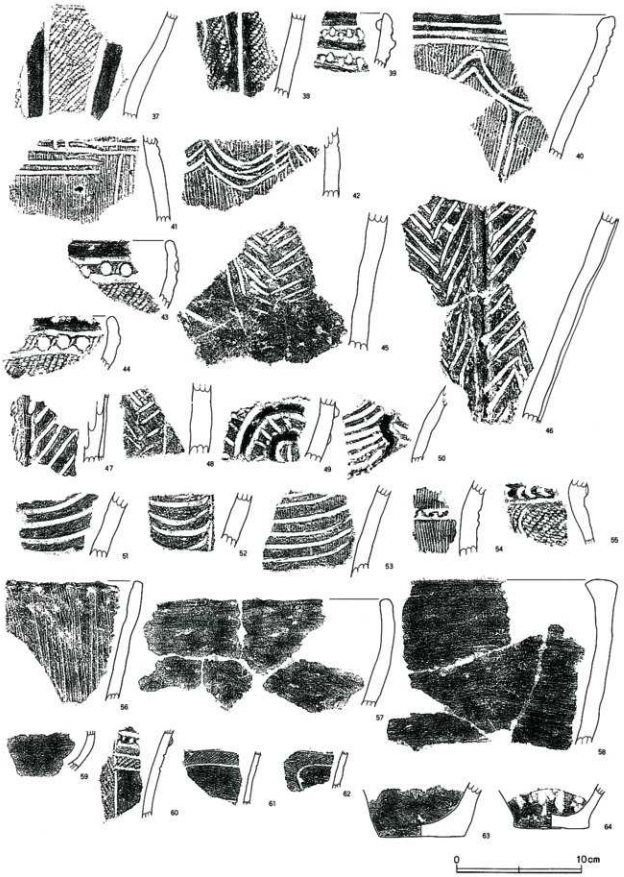
40は磨消し連弧文の施文される深鉢胴上半部である。二本沈線の連弧文の波底部に平行沈線の懸垂文が連結する。41・42も連弧文の胴部である。

43・44は同一個体と思われる。口縁直下に棒状工具による平行沈線が巡り、沈線間に工具の先端を用いた円形の刺突が充填される。45～48は懸垂文間に矢羽根状の沈線を充填する曽利系の深鉢胴部である。49は唐草文で地文として棒状工具による短沈線が充填される。50は蛇行懸垂文の左右に重弧文が描かれる。

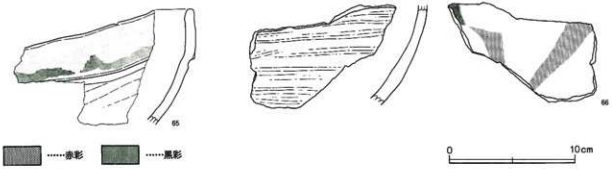
第121図　A区第46号住居跡出土土器（2）



第122図　A区第46号住居跡出土土器（3）



第123図　A区第46号住居跡出土土器（4）



51～53は弧状の沈線が重畳する胴部で、唐草文系の深鉢であると思われる。地文として櫛歯状工具の条線が施文される。54は半裁竹管状工具による平行沈線間に交互刺突を施すものである。55は胴部中段に爪形文を伴う隆帯が巡る。胴下半部には半裁竹管状工具の平行沈線を用いた蛇行沈線文が垂下する。56は櫛歯状工具による条線が施文される深鉢である。57・58は無文浅鉢の口縁部、59は無文胴張りの浅鉢の胴部である。

60～62は後期前葉の堀之内Ⅱ式で、覆土中への混入であろう。63・64は深鉢底部である。

65以下には赤色・黒色の顔料の塗布がみられる破片を一括した。

65は無文の浅鉢口縁である。波状口縁で、口縁直下に段を有する二重口縁状を呈する。顔料はこの段のすぐ上にごく断片的に付着している。これらの顔料が何らかのモチーフを描いていたものかは不明である。内面には顔料の付着はみられない。

66は浅鉢胴部である。彩色は内面に施され、外面は無文で横方向の研磨が施される。顔料は帯状に3箇所で観察され、本来何らかのモチーフの一部を構成するものと考えられる。

A区第47号住居跡（第124図～第130図）

D－4・5、E－4・5区に所在する。第144A号土壙に切られるものと思われる。また、第145・146・147号の各土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。直径約5.1ｍの不整な円形で、主軸方向は不明である。

壁溝は残りの良い部分で25cmを測る。床面は壁溝の切り合う北壁周辺で若干の起伏を伴うほかは平坦である。

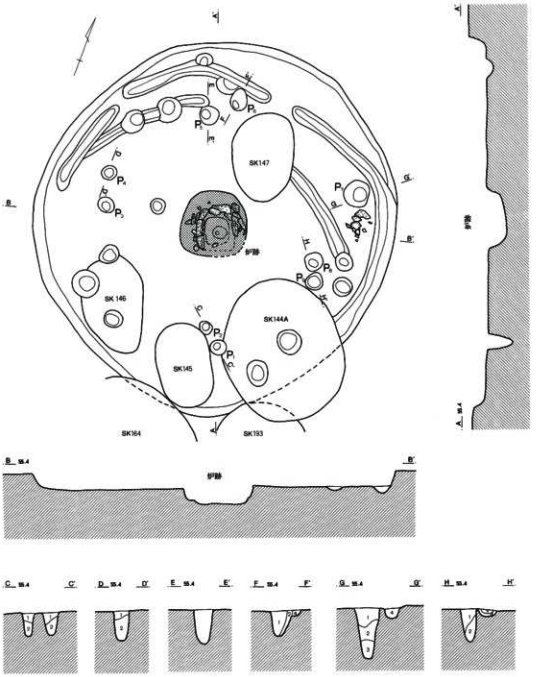
壁溝は西壁－北壁－東壁の三方向を2巡している。南壁では検出できなかった。ピットは壁溝にからむものも含めて21本検出された。炉跡を中心に直径約3.5ｍの環状に巡る壁柱穴配置を示し、深さは30～65cmを測る。この柱穴配置は外周側の壁溝に対応するものである可能性が高い。したがって本住居跡は最低1度の拡張を経験しているか、2軒の住居跡の切り合いである可能性が高い。炉跡は床面はほぼ中央に位置している。隅丸方形プランの石囲炉で、トレンチャーによる攪乱を受けて南東部分の炉石を失っている。長辺60cm、短辺50cm、炉床中央に円形の掘り込みを伴っており、この部分を含めた深さは22cmを測る。炉石には扁平な河原石が多用されており、部分的に複列になるなど、板状節理の片岩類を多用する中期末葉の方形石囲炉とは若干様相を異にしている。炉石上端は床面から1～3cmづつ露出している。

炉跡の周囲に不整な隅丸台形の掘り込みを検出した。炉石埋設に伴う掘り方と思われるもので、直径約90cmを測る。深さは18cmで、炉床面より1段浅くなっている。

覆土中から縄文時代中期後葉の土器片が出土している。これらの中には重複関係にある土壙出土の遺物が相当量含まれているものとみられる。例えば、第127図1は第145号土壙、同図6は第144A号土壙に帰属する可能性が高い。

土器以外の特筆すべき遺物として第295図8の垂飾がある。

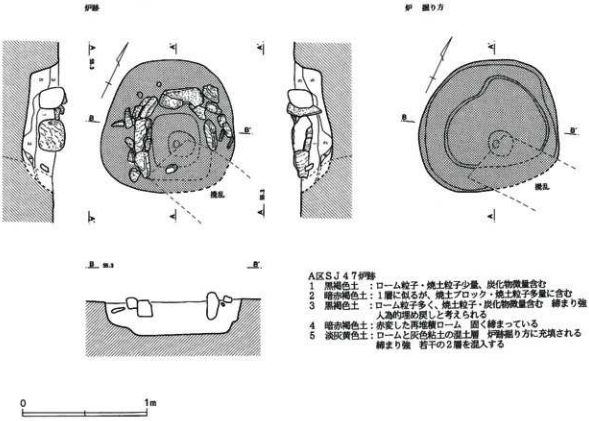
第124図　A区第47号住居跡



A区SJ47
1　暗褐色土　：ロームブロック・ローム粒子若干含む
2　黒褐色土　：ローム粒子を少量含む
3　暗褐色土　：ロームブロックを多く含む
4　暗褐色土　：ロームブロックを多く含む

0　2m

第125図　A区第47号住居跡炉跡



出土土器（第127図～第130図）

1はキャリパー類深鉢の口縁部である。口縁部に隆帯＋沈線による渦巻文を描き、左右に楕円形の区画が構成される。

復元された範囲では胴部に懸垂文は施文されず、RL単節の縄文が横位回転で施文される。この種の土器で横位回転の縄文は希有な例である。

2は深鉢の胴部で、胴部中段で強く外反する。

口縁部文様帯を持つキャリパー類の深鉢であると考えられ、ごく幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。一部では隣り合った懸垂文が連結してH字のモチーフを構成する。地文はRL単節の縄文である。

3もキャリパー類深鉢の胴部である。胴部中段のくびれをほとんど持たず、胴上半部が軽微に外反する。幅の狭い磨消し懸垂文が垂下する。

地文はLR単節の縄文であるが、胴下半部の一カ所でLRL複節の縄文が観察される。土器製作の中断を契機として施文原体が変化したものであろうか。新旧関係は複節の縄文が単節を切っている。

4は連弧文系の土器である。4単位の波状口縁で、口縁部から胴部中段のくびれ部分までが断片的に残存している。

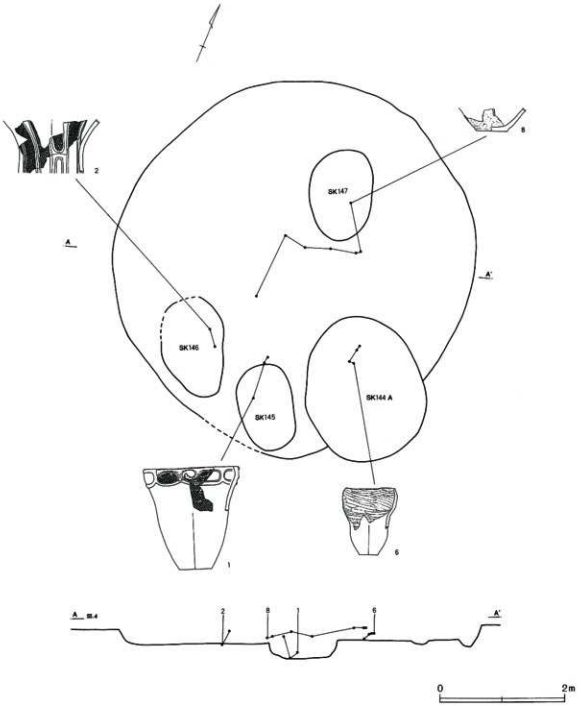
口縁直下と胴部中段に2～3本の平行沈線による横位の区画が存在する。胴上半部には三本沈線の連弧文が2段構成で描かれるが、最上段の弧線は口縁部の平行沈線と融合し、楕円形の区画文を構成している。

地文はLR単節の縄文で縦位回転で施文されるが、口縁直下の楕円形区画の部分では横位回転で施文されており、明らかにキャリパー類の口縁部文様帯を意識した構成となっている。

5は小型深鉢の胴下半部である。胴部中段に波状の沈線区画が巡る。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

6は無文の小型深鉢で、胴部中段から下を欠失する。口縁から胴上半部にかけては箆状の工具による斜め方向の削り、もしくはごく荒いなで様の調整が施され、

第126図　A区第47号住居跡遺物分布図



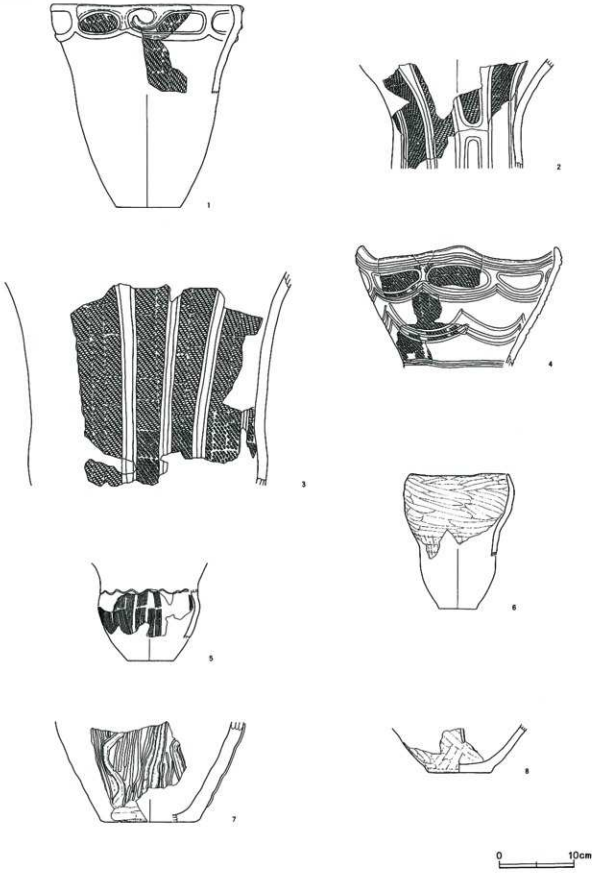
胴部中段から下では、さらに縦位の研磨が重ねられている。特に胴上半部における荒々しい調整方法は、中期後葉から末葉における無文の土器に、器種を問わず幅広く用いられているようである。口径13cm、現存高11.7cmを測る。

7は唐草文系の深鉢胴下半部である。二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に垂下する。地文は縦位の集合沈線である。底部周辺には横位の削り調整が観察される。

8は深鉢底部で、沈線による懸垂文が垂下する。地文はみられず、全面に篦状工具による幅広の研磨が施される。

9～14は勝坂式の流れを汲む土器である。9は鎖状の隆帯が貼りつけられる口縁部である。隆帯の左右に

第127図　A区第47号住居跡出土土器（1）



は沈線による方形の区画が描かれ、内部に縄文が施文される。10・11は刻みを伴う隆帯によって横位の区画文が描かれる胴部である。

12は棒状工具の平行沈線によって区画文が描かれる。13は強く内湾する深鉢口縁部で、棒状工具による同心円文が描かれる。

14は軽微に外屈する口縁直下に刻みを伴う１条の隆帯が巡り、その下には二本隆帯による曲線モチーフが展開している。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

15～35はキャリバー類深鉢の口縁部である。15は二本隆帯による十字のモチーフが描かれ、地文は縦位の撚糸文が施文される。

16～33は隆帯＋沈線による渦巻文に特徴づけられる一群で、16～21は波状口縁、22以下は水平口縁である。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。

22～26は渦巻文が楕円形の区画に変化するもので、胴部との境は隆帯によって明確に分帯される。

27・31は口縁部に区画内部に地文として縦位の細沈線が施文される。

28は両側に幅広のなぞりを加えた断面三角形の隆帯により渦巻文が描かれる。

29は波状口縁で、口唇と口縁部文様帯との間に円形の刺突列が巡る。30は内屈する水平口縁で、29に類似の刺突列が巡る。

32・33は同一個体で、また、３とも同一個体の可能性がある。比較的幅の狭い口縁部文様帯である。口縁直下に１条の沈線が巡り、隆帯＋沈線の渦巻文が描かれる。文様帯の下端は１条の沈線によって区画され、胴部には磨消し懸垂文が垂下する。地文はＬＲ単節の縄文で、口縁部では横位、胴部では縦位回転で施文される。

34は隆帯による横楕円形の区画が描かれる口縁部で、内部に縦位の短沈線が充填される。36～38もこれに類似する口縁部文様帯である。37は胴部に隆帯の懸垂文が垂下する。39は頸部付近の破片で、口縁部文様帯下端を区画する横位の隆帯がみられる。胴部に幅広の平行沈線による懸垂文が垂下し、地文として斜位の集合沈線が用いられる。

40は頸部無文帯と胴部文様帯の境界部分の破片である。両者の間を二本隆帯によって区画し、胴部に蛇行懸垂文が垂下する。地文はＲＬ単節の縄文である。

41は二本隆帯の懸垂文である。42は同様の懸垂文からクランク・渦巻などの隆帯モチーフが分岐する部分である。43は頸部と胴部の境を区画する隆帯である。

46～52は唐草文系の深鉢である。２本一組の隆帯による懸垂文が垂下し、間に一本隆帯による大柄のわらび手文が描かれる。地文は棒状工具による集合沈線で、基本的に縦位に施文されるが、懸垂文をはさんで矢羽根状に施文されたり、わらび手や渦巻モチーフに沿って放射状に充填施文されることがある。

53～56は半裁竹管状工具の平行沈線文によって文様が描かれる。53は平行沈線が上下を区画した中に波状の平行沈線が描かれる。地文は縦位の撚糸文である。

54・55は半裁竹管による懸垂文である。56は渦巻文の一部と思われるものである。

57～64は磨消し懸垂文の胴部である。64は扁平な隆帯の貼り付けを伴っている。

65～68は曽利系の深鉢で、65はくの字に内屈する口端上に文様帯をもつ。66は籠目文のみられる頸部である。67は荒い重弧文が描かれる口縁で、わらび手状のモチーフがみられる。

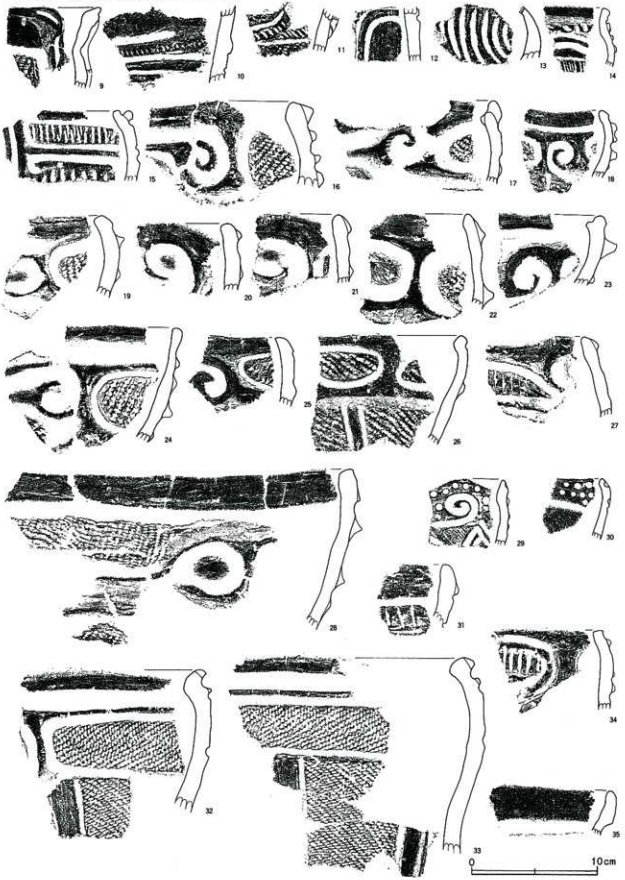
70～76は連弧文系の個体である。72は連弧モチーフが重畳して同心円状を呈する。74・75は結紐状のモチーフが描かれる。77・78は磨消しを伴う連弧文で、77は弧線から下が無文化して、円形の刺突列が巡る。

79～81・83は無文の口縁部で、浅鉢に伴うものである。82・83は地文条線上に平行沈線が垂下する。85は内屈する深鉢口縁で縄文のみ施文される。86は山形の波状口縁で、波長部に逆Ｖ字の隆帯が貫入する。

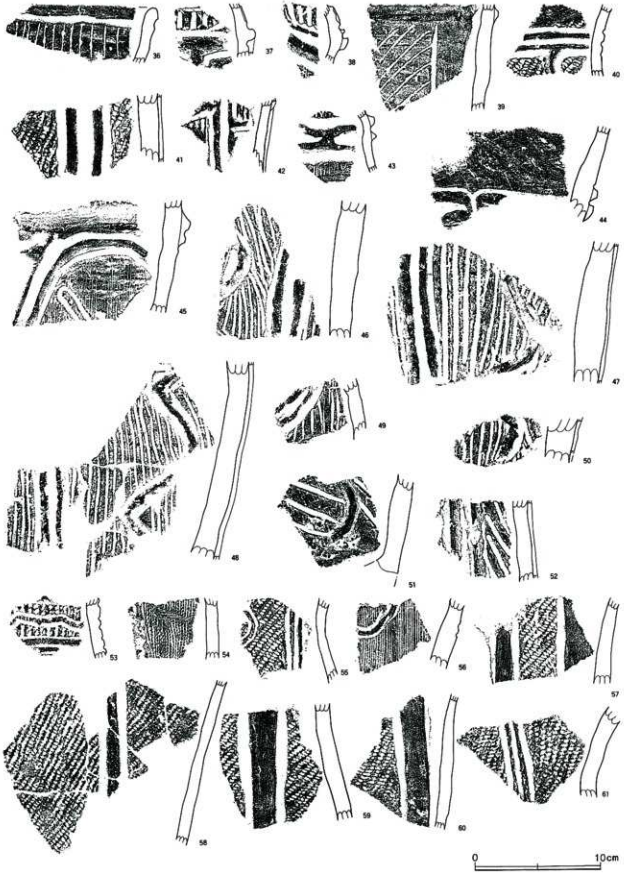
87はくの字に張り出す浅鉢胴部中段の破片である。

88以下には底部を一括した。

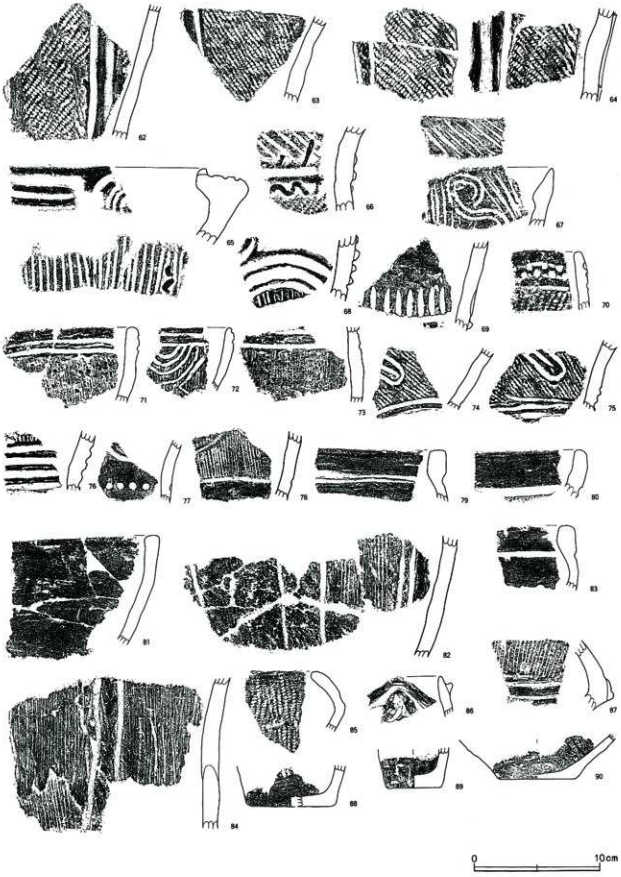
第128図　A区第47号住居跡出土土器（2）



第129図　A区第47号住居跡出土土器（3）



第130図　A区第47号住居跡出土土器（4）



A区第48号住居跡（第131図～第136図）

F・G－4区に所在する。第52・54号住居跡、第161・162号土壙を切っている。第86号土壙とも重複関係にあるものの、本住居跡との新旧関係は不明である。

南壁から長く延びる張り出しを伴った柄鏡形の竪穴住居跡である。張り出し部分を含んだ住居跡の全長は6.62ｍである。本体部分は直径4.6ｍの円形で、張り出し部分は長さ2.02ｍ、最大幅1.23ｍを測る。炉跡中心部から張り出し部埋甕中心までの距離は約3.3ｍで、住居跡本体の半径にほぼ等しい。本体部分の壁高は残りの良い部分で12cm、張り出し部分では15cmを測る。主軸方向はN－27.5°－Eを指す。

床面にはほぼ平坦であるが、張り出し部ではいくぶん低くなっている。堅緻な床面は検出されなかったため、ローム層の露出をもって床面とした。壁溝は検出されなかった。

床面上から多数のピットが検出されているが、東壁部分では第54号住居跡と重複しているため、本住居跡との対応関係が明確でない。西壁部分では８本のピットが壁に沿って弧状に分布しており、本来壁柱穴構成をなしていたものであろう。配置に部分的な重複がみられるが、建て替えの結果と言うよりは別個の遺構との切り合いの可能性が高い。

張り出し部分からも多数のピットが検出された。これらのうちＰ１・３、Ｐ７・８は主軸線をはさんで対称に配置されている。また、後述埋甕２の左右にも１対のピットが配置されている。ピットの深さは50～80cmを測る。

炉跡は主軸線上で床面中央よりやや前方に位置している。これは張り出し部まで含めた住居跡全長のほぼ中間点にあたっている。長方形プランの石囲炉で、炉石は破壊を受け旧状を留めていなかったが、長軸側の２辺を板状節理の石材で囲っていたものとみられる。長径68cm、短径44cmを測る。主軸方向は住居跡本体の主軸に等しい。炉床中央に不整円形の窪みを持ち、この部分も含めた床面からの深度は16cmを測る。壁の立ち上がりはほとんど垂直である。

石囲部の周囲に炉石の埋設を目的とした掘り方を伴う。一辺約80cmの隅丸正方形で、床面からの深さは炉本体のそれにほぼ等しい。壁はほとんど垂直に立ち上がっている。

張り出し部に関わる２カ所で埋甕が検出されている。一カ所は張り出し部のほぼ先端、もう一カ所は住居跡本体に張り出し部が接続する箇所である。前者を埋甕１、後者を埋甕２と命名したが、両者とも２個体の土器の複合であることがわかっている。

埋甕１は張り出し部の先端から50cmほど入った場所に位置している。胴上半部を欠いたひさご形土器（第134図２）の内側に胴下半部を欠失した深鉢（第134図１）が入れ子になった状態で検出された。埋甕は全体として炉跡寄りに傾斜して埋設されている。内周の埋甕の口縁の高さは本住居跡の遺構検出面にほぼ等しい。埋甕の周囲を囲うようにして礫の集中がみられる。

埋甕２は住居跡本体と張り出し部の連結点から、炉跡側に60cm程入った場所に位置している。当初口縁の一部を欠いた両耳壺（第135図３）を正位かつ単独で埋設したものと考えられたが、整理段階で周辺出土の土器片を接合したところ新たに同上半部を欠いた両耳壺（第135図４）の存在が明らかとなった。後者は破片の状態で前者の周囲に並べられていたものとみられる。埋甕の口縁の高さは本住居跡の遺構検出面と同じかやや高く、住居跡本体の床面のレベルと比較しても明らかに高く、むしろ炉石最上部のレベルに近い。周囲には埋甕１と同様の礫の集中がみられる。

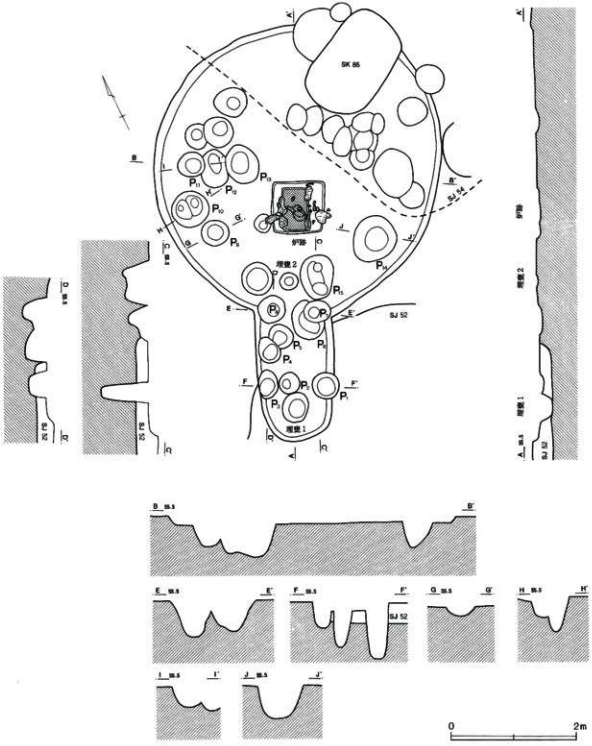
なお、埋甕２の南にも直径約90cm程の環状に礫の集中する部分がみられるが、この部分に土器の埋設はみられない。

このほか、炉跡を囲む直径３ｍ程の範囲にも環状に礫や土器片の集中する部分（仮称：周礫帯）が存在している。礫や土器片の出土するレベルは炉跡における炉石上端、また埋甕における埋設土器口縁部のレベルに一致している。これらの礫や遺物が住居跡廃絶後に投棄されたものであるにしても、竪穴住居本来の生活面は調査段階で床面としたローム層よりも上にあった

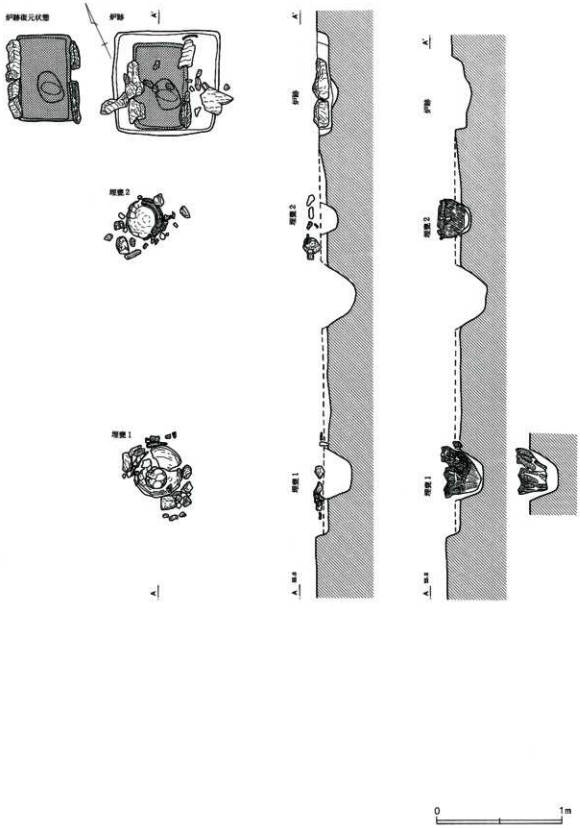
ものと考えるのが妥当であるかも知れない。

前述の4個体の埋甕のほかに、覆土中から復元個体を含む縄文時代中期末葉の土器が出土している。いずれも遺構検出面付近から多量の礫とともに出土したもので、周礫帯中からの出土も少なくない。

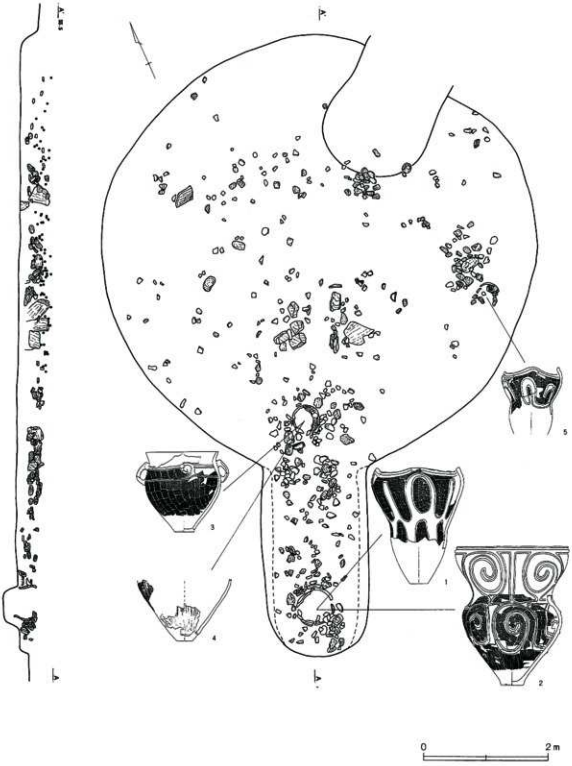
第131図　A区第48号住居跡



第132図　A区第48号住居跡炉跡・埋甕

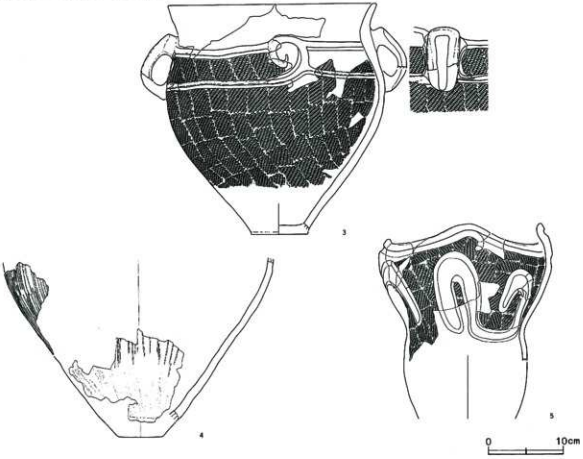


第133図　A区第48号住居跡遺物分布図



第134図　A区第48号住居跡出土土器（1）

第135図　A区第48号住居跡出土土器（2）



出土土器（第134図～第136図）

1は埋甕1内周の土器で、胴下半部を欠失している。小波状口縁をなし、口縁直下に1条の沈線が巡る。胴部中段のくびれ部分で文様帯が上下に分帯され、同上半部には充填縄文手法による玉抱き文が描かれる。胴下半部には逆U字のモチーフが描かれる。横浜市洋光台猿田遺跡の柄鏡形住居跡出土土器に同種の玉抱き文を見ることができる。さらに、本遺跡D区第36号住居跡の埋甕も、全体のプロポーションの違いを別にすればほぼ同種の文様を描くものである。

口径31cm、現存高31.4cmを測る。

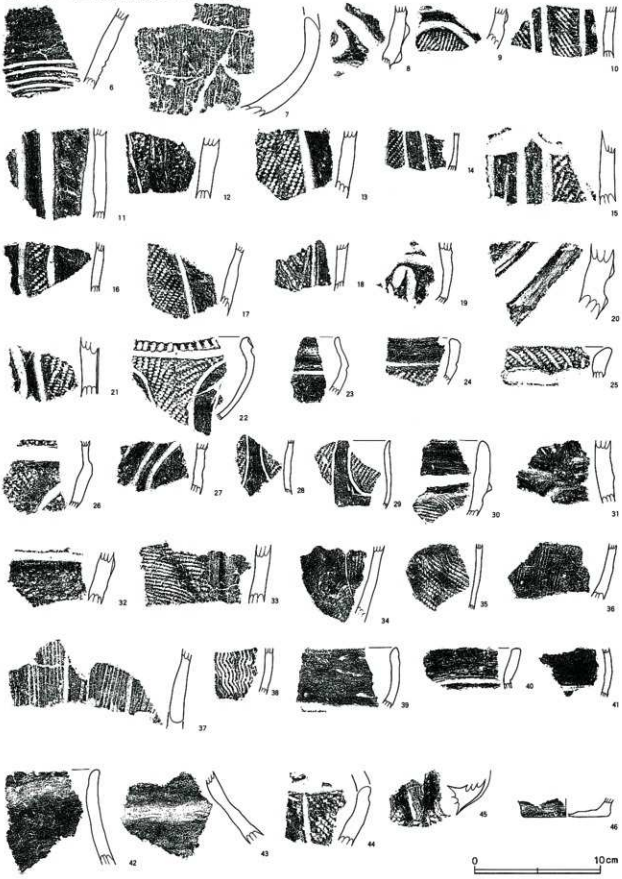
2は埋甕1外周の土器である。胴部中段の隆帯区画を境として上下2段構成の文様が描かれるものであるが、胴上半部を欠失している。

胴下半部には横S字構成の大柄な隆帯渦巻文が描かれる。胴上半部にも同様の文様が描かれていたものとみられ、全体として同種の器形・文様を重ねたひさご形の深鉢であったと考えられる。地文は渦巻文部分がRL単節の縄文がモチーフに沿って充填され、胴下半部では櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。最大径約38cm、現存高34.2cmを測る。

3は埋甕2の本体で、両耳壺である。底面が抜け落ちているほか、口縁部の大半と胴上半の一部を欠失する。両耳壺としては器形の変化に乏しく、頸部に若干のくびれを持つほかは全体として緩やかなカーブを描く。頸部は無文で軽微に外反し、胴上半部にはキャリパー類の口縁部文様帯に由来する区画文が位置している。この区画文上には隆帯による渦巻文と橋梁状の把手がそれぞれ1対づつ配置される。地文はRL単節の縄文が縦位回転で施文される。器高30.4cm、最大径29cm、底径7.4cmを測る。

4は埋甕2の上面で出土した両耳壺の胴部である。小破片の状態である程度まとまって出土したものであるが、胴部中段から下半にかけての部分が断片的に復

第136図　A区第48号住居跡出土土器（3）



元されたのみである。地文は半裁竹管状工具による集合沈線が垂下する。底部付近では縦位の研磨調整が徹底される。

5は周礫帯の炉跡東部分で出土した小形深鉢である。波状口縁をなし、口縁直下に1条の沈線が巡る。この沈線は波頂部でわらび手状に屈曲しており、キャリパー類における口縁部渦巻文を意識したとも取れる構成となっている。胴部には磨消し縄文の無文部主導による横S字・逆J字等のアルファベット文が描かれる。地文はRL単節の縄文で、口縁直下では横位回転、それ以外では基本的に縦位回転で施文される。口径17cm、現存高15.5cmを測る。

6は頸部無文帯がみられる破片で、本住居跡より古い段階のものと思われ、覆土中への混入と考えられる。胴部との境は半裁竹管状工具による横位の平行沈線によって区画されている。

7は縦位の条線のみ施文される胴部破片である。非常に強い胴張りの器形で、また底部にごく近い部分の破片である。浅鉢か両耳壺か、いずれにせよ非常に特異な器形をもった土器であると思われる。

8・9はキャリパー類深鉢の口縁部文様帯である。隆沈線により、崩れた渦巻文や入り組み文が描かれる。

10～18は磨消し懸垂文の施文される胴部である。15は口縁部文様帯下端の沈線区画がみられる。19は15と同じ部位で、磨消し懸垂文の無文部にわらび手状の沈線が描き込まれる。20・21は隆沈線による何らかのモチーフが展開する胴部である。

22～25の口縁部は8・9のような口縁部文様帯をもたない。いずれも口縁直下に1条の沈線を巡らせる。22は口端部に縦位の刻みを施す。胴部文様は玉抱き文であろう。地文はRL単節の縄文が充填手法で施文される。

23は薄手で堅緻な器壁で、口端が軽微に外反する。口縁直下に1条の沈線が巡るが、縄文は施文されない。25は口端部にRL横位回転の縄文が施文される。26～29は沈線による磨消しモチーフの描かれる胴部である。29は口縁に無文帯をもたず、直接口端から文様展開する。

30は口縁直下に断面三角形の隆帯が巡る。胴部には無節Lの縄文が施文され、一部隆帯側縁にも乗り上げて施文されている。

31～33は微隆起線文の口縁および胴部である。微隆起線の両側にはしばしば幅広でごく浅い沈線によるなぞりが加えられる。

34～36は平滑な器面に浅く細密な縄文が施文される胴部である。34はごく細い沈線により磨消し文様が描かれる。

37は櫛歯状工具による縦位の条線が施文される胴部で、沈線による懸垂文が垂下する。38は波状の条線が施文される。

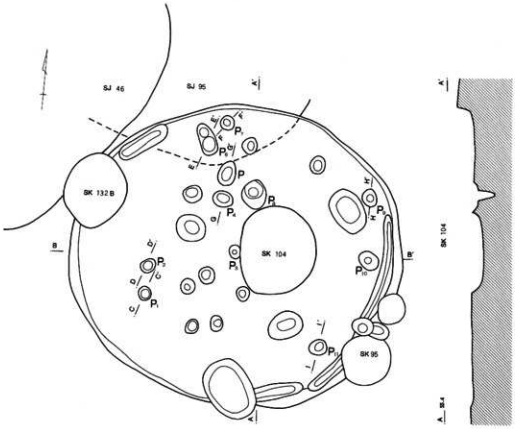
39・40は無文の口縁部で、胴部との境に1条の沈線が巡る。39は内湾する口縁、40は軽微に肥厚しつつ、沈線の部分でくの字に外屈する。41も口縁部に近い部位の破片で、いずれも浅鉢口縁部と考えられる。

42～45は両耳壺の破片である。42は外反しつつ垂直に立ち上がる無文の口縁部、43は肩部から口縁部に至る部分で、中途に緩い段を構成する。44は胴部中段の破片で、文様帯の下端を区画する沈線がみられる。胴下半部には磨消し懸垂文が垂下し、地文はLR単節の縄文が縦位回転で施文される。

45は橋梁状の把手である。背面に強いタッチのなぞりが加えられ、幅広の凹線となっている。地文はRL単節の縄文で、一部が把手上に乗り上げている。

46は無文の底部である。非常に薄手のつくりで、成形後底面を削り込んでいるかも知れない。

第137図　A区第49号住居跡



AESJ 49

1　暗褐色土　：ローム粒子少量含む　やや粘性あり、締まり良し
2　暗褐色土　：ロームブロック多く含む　粘性に富み、締まり良し
3　暗褐色土　：ロームブロック・ローム粒子微量含む　粘性に富み、締まり良し
4　明褐色土　：ロームブロック多く含む　粘性に富み、締まり良し
5　極暗褐色土：ローム粒子少量、炭化物微量含む　粘性あり、締まり良し
6　暗褐色土　：ロームブロック・ローム粒子若干含む　粘性あり、締まり良し
7　暗黄褐色土：ローム粒子極めて多く含む　粘性に富み、締まり良し

A区第49号住居跡（第137図～第140図）

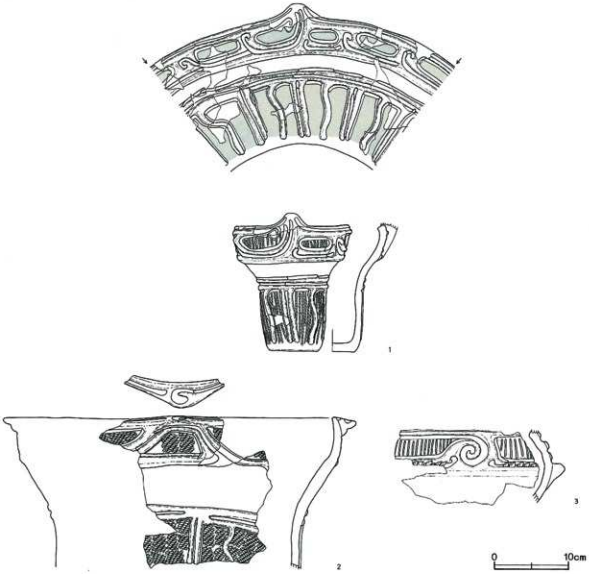
F－6区に所在する。第95号住居跡・第95号土壙を切っており、第104号土壙に切られる。また、第132B号土壙とも重複関係にあるが、本住居跡との新旧関係は不明である。

楕円形の住居跡で、長径5.22m、短径4.7mを測る。壁高は26cmを測る。住居跡の長軸を主軸と仮定した場合、主軸方向はN－76°－Wを指す。床面ははぼ平坦で、南に向かって傾斜している。

壁溝は南東壁と北西壁の一部で検出した。調査した範囲では重複はみられない。

床面上から多数のピットを検出した。住居跡中央から北壁にかけて、約3.5m×2mの帯状の範囲にその大半が集中する。これらのピット全てが本住居跡に伴う柱穴とするには不自然な配置であり、別個の遺構が切り合っている可能性がある。P1・2・6・7・9・10・11等は壁に沿って環状に巡っており、壁柱穴を構成するものであろう。

本住居跡から炉跡は検出されなかった。全体の位置関係からいって、第104号土壙との切り合いで破壊されている可能性がある。埋甕等も発見されていない。

遺物は主として縄文時代中期後葉の土器が出土している。

第138図　A区第49号住居跡出土土器（1）